

少年事件と生育環境としての人間関係⁽¹⁾

森 邦 昭

- (目次)
- 1 絶対的所与としての生育環境
 - 2 近年の少年事件の特質
 - 3 少年Aの場合
 - 4 R子の場合
 - 5 人格未成熟のある若夫婦の場合
 - 6 ユルゲン・バルチュの場合
 - 7 おとぎ話の場合
 - 8 虐待の連鎖の全容
 - 9 初源療法
 - 10 再び少年Aの場合
 - 11 悪人正機説と闇教育の克服

1 絶対的所与としての生育環境

あらゆる生物は環境に適応することによってしか、その生存をはかることができない。それぞれの動物はその動物に独自の環境世界をもち、同一の対象物であっても、それはそれぞれの動物によってまったく違ったように知覚されているということを論証したユクスキュルも、「動物主体は、もっとも簡単なものも、非常に複雑なものも、同じ完全さでその環境世界に適応している。単純な動物には単純な環境世界が、複雑な動物にはそれだけ豊かな環境世界が対応する」⁽²⁾と考えている。動物とは異なって、草や木など、根が生えているために固定的な生活を強いられる植物にとっては、環境世界に適応できるか否かは、まさに文字どおり致命的な問題であるだろう。

ユクスキュルの用語法では、生物の「環境世界」(Umwelt)とは、その周囲に広がって見える「環境」(Umgebung)の単なる一片を意味するとされ、この「環

境」というものは、われわれ自身の、つまり人間の「環境世界」に他ならないとされる⁽³⁾。ここでは、「環境世界」と「環境」という一往の区別が設けられている。たとえば、犬にとっての世界には色彩が欠けていて、イエバエにとっての世界には濃淡だけが存在していると考えられるが、そのような具合にしてそれぞれの動物がいわば主体的に意味を与えている世界が「環境世界」(Umwelt)であるとされる。それに対して、人間に対して開かれている世界や、単なる物理的・化学的過程の総体としての世界が「環境」(Umgebung)であるとされる。いずれにしても、それぞれの生物種は、それぞれが独自に分節化した世界の中に住み込んでいると考えられる。

とはいえ、“人間”と“人間を条件づけている諸要因としての環境”の相互作用に主として焦点を絞りたい本稿の問題関心からすれば、この用語法にはあまりこだわらなくてもよいのではないかと思われる。念のために英独＝独英辞典を参照してみると⁽⁴⁾、Umweltにはenvironmentが、Umgebungにはsurroundingsが当てられている。environmentにはUmweltとUmgebungの両方が、surroundingsにはUmgebungが当てられている。たしかに、これらの言葉には若干のニュアンスの違いはあるとしても、いずれの言葉も「取り囲んだ状態」や「身の回りの世界」のことを意味している点では共通している。

また、ユクスキュルの用語法にしても、人間の場合においては、「環境」(Umgebung)というのは結局のところ「環境世界」(Umwelt)に他ならないとされるわけであるから、人間の場合しか考察対象にしない本稿においては、Umweltというものについてだけ考えてみればよいということになるであろう。なお、訳語の問題であるが、このUmweltは、“Um=welt”であるから、たしかに“めぐり囲む=世界”ということになるので、「環境世界」と訳されなければならないようにも思われるが、必ずしもそうする必要もないであろう。通常は単に「環境」と訳されていると言えるであろうからである。

Umwelt (環境) という言葉は⁽⁵⁾、19世紀初頭のドイツにおいては明らかに、まずは「風土」(Landschaft)など、いわばありのままに直に経験された身の回りの出来事を見るさまざまな局面の総体を束ねる言葉であった。したがって、一つのものとして体験される全体の内部では、自然的要因と文化的要因が区別される必要はなかった。ユクスキュル以後、自分のものではない環境は、どのようにしたら他の観察者(人間)によって再構成されるのかという方法論的な問題が出てきた。フッサールやハイデガー、アーノルド・ゲーレンやマックス・シェーラーなども、ユクスキュルに触発されたかたちでこの問題に取り組んでいる。また、デュルケム以来、環境という概念は社会学においても使用されている。さらに、ピアジェは生物学的な環境概念との関連から、発生的認識論を

展開する心理学を構築している。およそこのようにして、今日では環境という概念は、生物学、遺伝学、生態学、教育学、心理学、社会学などにおいて用いられるようになった。

たいていの国語辞典では、「環境」の項を見ると、自然的環境と社会的環境という区別がなされている。しかし、以上のことを基にして少し考えてみれば、環境というものは、いろいろな要因から成り立っているとしても、たしかに一つのまとまった全体としてわれわれ人間を条件づけていると言えるのではないだろうか。個々の要因に分解すればもはや意味をなさない諸条件の総体としての環境のなかで、人間は生きていかなければならない。換言すれば、人間が生きていくというのは、それぞれに与えられたトータルな意味での環境と相互作用していくということになるであろう。

そして、この相互作用において、人間はよりよく生活していくことができるようにするために、環境を“改善”しようとする。環境をトータルな意味で改善することができれば、人間のこのような性質が“歴史の進歩”や“生活の向上”などにつながる可能性もあるかもしれない。しかし、環境を部分的に、あるいは恣意的に“改竄”することによって、それまでの調和的な環境の全体を歪めてしまった結果、“環境の破壊”や“倫理の崩壊”などが引き起こされてしまったと見ることもできるのではないだろうか。

ところで、善くも悪くも、人間が環境にはたらきかけて環境を改善しようと発想するのは、主として“大人”の発想なのではないだろうか。“子ども”にとっての環境は、(従来)もっと違ったかたちで与えられているのではないかと思われる。というのも、子どもにとっての環境は、子ども自身の力によっては容易に変化させることのできない所与である場合が多いからである。子どもには、環境を自分に都合のよいものに変えたいと願っても、それが無理な場合がほとんどである。大人にとっては環境が操作可能な対象であったとしても、子どもにとっては環境は“黙って受け入れるしかない”所与であり、“適応しなければ生きていけない”所与ではないだろうか。すなわち、子どもにとってのその意味での生育環境は“絶対的所与”であると言うことができるのではないだろうか。子どもが大人から強要される“大人と子どもの人間関係”(教育)のあり方は、(従来)とりわけそうではないかと思われる。

さらに、もう一つの問題として、大人が(子どものためを願って)作りだした現代の生活環境が、子どもの心と体により影響ばかりを与えているとはかぎらないのではないかという問題もある。生活環境のなかには当然、大人と子どもの人間関係のあり方も含まれる。否むしろ、それが中心的な問題になっているとさえ言ってもよいかもしれない。子どもにとってよい生育環境であるか

否かを判定する基準は、大人の側の思惑に求められるべきではない。そのようなことをしても、それは無意味である。所与の環境を子どもの側がどのように受け取っているか、それがすべてであるべきであるし、現にそれがすべてである。そうでなければ何事もうまくいっていないからである。このような観点から現代の生活環境を見直し改善していくことが求められているし、それを果たすことが大人の責任であり、社会の義務であると言えるだろう。本稿では、このような課題に対して、ますます看過できない社会問題となっている少年事件などのいくつかの事例分析を試みることによってアプローチして、健全な人間形成に不可欠の条件を解明したい。

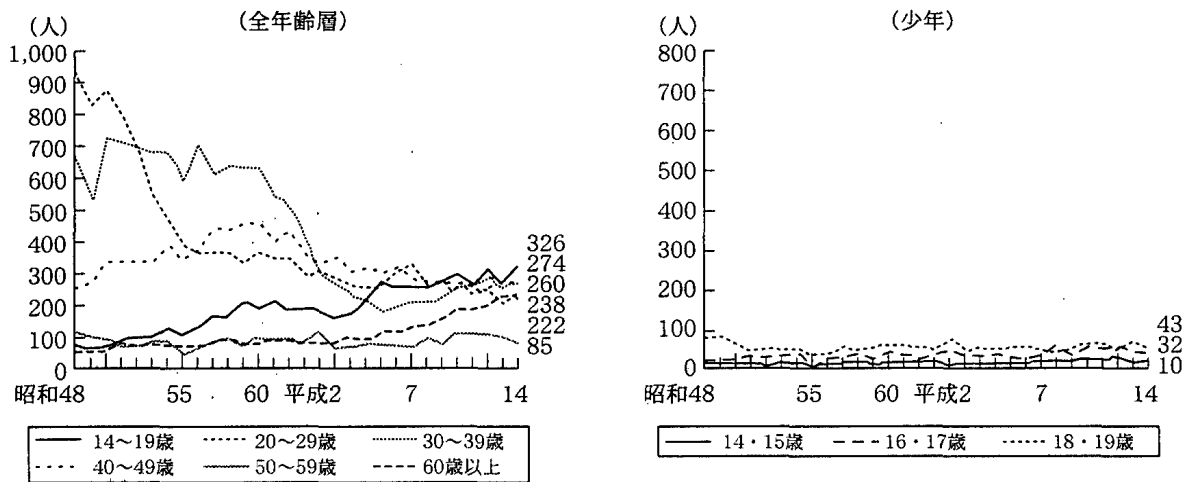
2 近年の少年事件の特質

衝撃的な少年事件がなかなか後を絶たない。少なくとも、そのように感じられる。「厳罰化」と「被害者への配慮」を柱にして改正された少年法が平成13年(2001年)4月1日から施行され、現在は子どもたちの犯罪を受けとめて防ぐための枠組みが変わりつつある状況にある⁽⁶⁾。しかし、そもそもどのようにしたら子どもたちの事件を未然に防止できるのかをはじめとして、事件を起こした子どもたちの更生をどのようにして図るのか、被害者への償いはどのようにして果たさせるのかなど、基本的な課題の解決は、依然として道遠しの感も否めない。また、近年わが国では凶悪な犯罪が増加しているのではないかという印象も否めない。そこで、最新版の『犯罪白書』により、わが国における殺人と強盗(凶悪犯罪)の場合の年齢層別の検挙人員の推移(昭和48年～平成14年の29年間)を見ることから始めたい⁽⁷⁾。(次頁のグラフを参照)

殺人の場合は、当初、20歳代・30歳代の若年・中年層が多かった。しかし、20歳代は昭和50年代から、30歳代は昭和60年代から減少している。40歳代は当初は漸増傾向にあったが、昭和60年代から漸減傾向に転じている。50歳代は当初から漸増傾向にあったが、昭和55年くらいからその傾向がわずかながら加速している。60歳以上の層はしばらく横這い状態であったが、平成に入ってから漸増し続けている。注目の14歳から19歳までの犯罪少年の数は他の層に比べれば少なく、推移の変化もほとんど見られない。それでは、もう一つの凶悪犯罪である強盗の場合はどうであろうか。

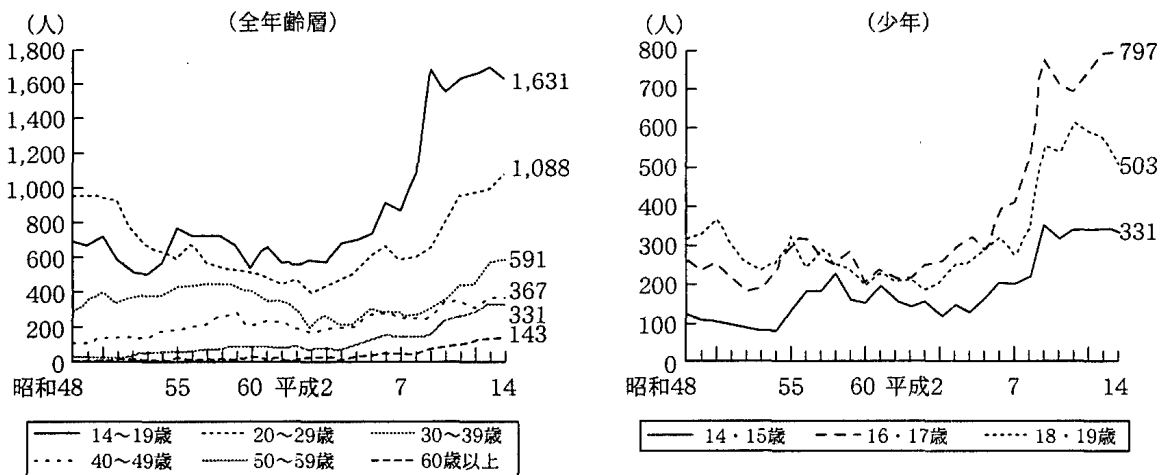
強盗の場合は、当初、20歳代が最も多かったが、昭和50年代に急激に減少した。注目の14歳から19歳までの犯罪少年の層は、昭和50年くらいから一時急減したが、昭和53年あたりから急増に転じ、昭和54年くらいから20歳代の数を追い越して、それ以来今日まで最も数の多い層になっている。昭和55年以降の一時期、少年・20歳代・30歳代の若年・中年層を中心に、減少ないし頭打ちの傾

殺人の場合



平成15年版犯罪白書276頁

強盗の場合



平成15年版犯罪白書277頁

向が見られたが、その後平成に入ってから全年齢層とも増加傾向に転じている。特に、平成8年以降は、犯罪少年と20歳代といった若年層での増加傾向が著しい。14歳から19歳の犯罪少年の場合、平成14年には平成7年の1.9倍に増加している。高校生の年代に対応する16・17歳の中間少年層の場合には、2.0倍に達している。20歳代の場合でも、1.9倍に増加している。

以上のとおり、凶悪事件にかかわった少年の数を見ると、強盗の場合、たしかに増加していると言えるだろう。それに反して、殺人の場合は、一貫して推移の変化はほとんど見られない。しかし、だからと言って、安心感が得られているわけでもない。殺人事件で検挙された少年の実際の数としてはあまり変化

が見られないにしても、何かが大きく変化しているように感じられる。元・家庭裁判所調査官の原口幹雄（社団法人家庭問題情報センター専務理事）は、全体の事件数は増加していないけれども、「特異な事件」が多くなったことが、社会に与える不安や衝撃を大きくしているのではないかと見ている⁽⁸⁾。特に殺人事件の場合、加害者が判明したら、それが「低年齢」の子どもであったり、「普段はいい子」がいきなり事件を起こしたと見えるような場合が目立っているのである。そうすると、親や教師は、もしかしたら、自分の子も、自分の教え子も、といった具合に何とも言い様がない不安感に掻き立てられることになる。

とりわけ平成9年（1997年）に起きたいわゆる神戸連続児童殺傷事件の後、なぜそのような事件が起きてしまったのかということを知る必要があるとする考え方が強くなってきている。先述の原口氏が座長を務めた「重大少年事件の実証的研究」（家庭裁判所調査官研修所）では、1997～99年の殺人・致死事件などの分析を行ったそうである。それによると、一人で事件を起こした少年は、次の3つのタイプに分けられたという。

- ① 幼少期から問題行動を頻発したタイプ
- ② 表面上は問題を感じさせなかったタイプ
- ③ 思春期に大きな挫折を体験したタイプ

今、社会から特に不安がられているのは、②のタイプである。このタイプは、親や教師の求める仮面をかぶっていただけで、バーチャルな世界で知識や欲望を肥大化させていたという。このタイプの特質は、情緒的な交流に欠け、現実感が乏しいため、いきなり「とんで」しまいやすく、罪の意識や罪障感が生じにくい点にあるという。このような特質は、近年の少年事件に顕著に見られるようになってきた。そのために、最近の少年事件は原因が見えにくい。

それに引きかえ、昔の少年事件はわかりやすかったとも言われる。以前であれば、家裁調査官が、窃盗や傷害事件を起こした少年とその保護者に対して、被害者に謝罪と弁償をするようにと話せば、保護者も少年を引っ張って被害者のところへ謝りに行ったという。必死に頭を下げる保護者かどうか、そのつらい場面から逃げない少年かどうかということが、更生の可能性を測る決め手でもあったそう。ところが、今はそうではなくなっている。事件を起こした少年もその保護者も、諭されても悪びれない、白けている、無責任であるなど、常軌を逸した反応をしているようだ。要するに、“自己中心的”な傾向がますます加速しているのが特徴的である。

以前は、劣悪な環境や集団のなかで非行を繰り返す①のタイプが多かった。

したがって、その劣悪な環境や集団から自らを断ち切ることが少年にできるようにさせることが、少年の更生を可能にすることにつながるポイントであった。それゆえに、従来は少年院でも、「これまでのことは忘れて、君は少年院で生まれ変わるんだ」という教育に重点が置かれていた。ところが、そのような矯正教育はもう通じなくなっている。現在では、少年が犯罪に手を染めるようになる背景や原因などが以前とは異なっているからである。要するに、少年を取り巻く「環境」が決定的に変化してきているのである。

上述の『犯罪白書』は⁽⁹⁾、近年では殺人・強盗といった凶悪犯罪を起こした少年の場合、両親がそろっている家庭の少年が事件を起こしている数と割合が高いことを指摘している。かつてとは異なって、今時の少年事件は、生活苦や悪友との交流などといった劣悪な環境が原因になって引き起こされているわけでは必ずしもないのである。それでは、この『犯罪白書』では、どこに原因を求めているのだろうか。そこでは、特に強盗の場合、その数が漸増傾向にあることに着目して、家庭、とりわけ少年に対する「親の指導力の低下」に原因を求めている。少なくとも、そのようなケースが増加していることが示唆されると分析しているのである。

となると、近年の少年事件を理解するためには、「親の指導力」なるものを見極めなければならないということになるであろう。しかし、「親の指導力」とは、一体どのようなことを言うのだろうか。このことに関しては、いろいろの立場からいろいろの考え方があるだろうけれども、親に指導力があるとかないとかいうのは、端的に言えば、まさに少年の生育環境としての親子の人間関係の善し悪しのことであると捉えることもできるのではないだろうか。子どもは、原則的に、その親や家庭から逃げられない。逃げれば、たちまち生活が成り立たなくなる。つまり、親子の人間関係、家庭での人間関係は、子どもの生育に決定的な影響を及ぼす環境であると同時に、絶対的所与でもある。そのようなことが言えるのではないかと思われる、あるいはもう少し踏み込んで言えば、そのようなことしか言えないのではないかと思われる事例を次に見てみることにする。

3 少年Aの場合

今を去ることおよそ7年前、平成9年（1997年）6月28日、後にその全貌が明らかになっていったいわゆる神戸連続児童殺傷事件で、中学3年生の男子生徒、少年A（当時14歳）が逮捕された⁽¹⁰⁾。この事件をきっかけにして、いろいろな動きが即座に出てきた。7月1日には、当時の梶山静六官房長官が、記者会見で「凶悪犯罪者がその年齢によって刑事罰の対象にならないということで

果たして抑止力になるのか、社会的な正義が保てるのか」と発言し、少年法の見直し、改正、厳罰化論議の口火を切った⁽¹¹⁾。同日、当時の小杉隆文部大臣は、第16期中央教育審議会に対して「幼児期からの心の教育の在り方について」諮問するつもりであることを閣議で報告した⁽¹²⁾。この連続児童殺傷事件は、当時のわが国の社会全体を震撼させ、わが国の教育のあり方について深く見直すことを迫る大きなきっかけの一つとなった。

本稿では、この事件の詳細に立ち入ることはできない。それゆえに、多少長くなるが、神戸家庭裁判所が同年10月17日の第5回審判で少年Aに対して言い渡した決定（要旨）において認定している非行事実を見ることによって、事件の概要をとりあえず掴んでおくことにしたい。少年Aは、

- 1 1997年2月10日午後4時35分ころ、神戸市須磨区内の路上で、小学校6年生の女児（当時12歳）の姿を認めるや、突然、かばんの中に持っているショックハンマーで殴ろうと思い立ち、同女に対し、取り出したショックハンマーで、その左後頭部を1回殴打する暴行を加え、よって、同女に対し加療約1週間を要する頭部外傷の傷害を負わせた。
- 2 上記日時場所において、上記同様、小学校6年生（当時12歳）に対し、上記ハンマーでその右後頭部を1回殴打する暴行を加えた。
- 3 同年3月16日午後零時25分ころ、同区内の路上で、通行中の小学校4年生の女児（当時10歳）に対し、未必の殺意をもって、八角玄のうでその頭部を殴打し、よって、同月23日午後7時57分、頭がい粉碎骨折を伴う高度の脳挫傷により死亡させ、もって同女を殺害した。
- 4 同日午後零時35分ころ、同区内の歩道上で、通行中の小学校3年生の女児（当時9歳）に対し、未必の殺意をもって、刃体の長さが約13センチのくり小刀でその腹部を突き刺したが、同女に加療約14日間を要する腹部刺創及び外傷性下大静脈損傷等の傷害を負わせたにとどまり、殺害の目的を遂げなかった。
- 5 同年5月24日昼過ぎころ、自宅を出て自転車で走っているとき、同区内の小学校付近の路上で、小学校6年生の男児（当時11歳）と偶然出会い、とっさに、同児ならば、タンク山頂上付近まで連れて行き、そこで殺せると思い、同児を「向こうの山に亀がいるから、一緒に見に行こう」と言って誘い、同日午後2時過ぎころ、タンク山頂上のケーブルテレビアンテナ基地局施設の入り口前に連れて行き、同所で、殺意をもって、後ろから右腕を同児の首に巻き、締めつけながら同児を倒し、次いで、あお向けにし、馬乗りになって手袋をした両手で首を締めた後、自分の履いている運動靴

のひもを抜き、そのひもで同児の首を締め、よって、即時同所において、同児を窒息により死亡させ、もって、同児を殺害した。

- 6 同月25日午後1時ころから午後3時ころまでの間に、上記施設の中で、床下から上記男児の死体を引き出し、金のこぎりを用いて上記男児の頸部部分を頭部と胴体部分に切断し、同月27日午前1時ころから3時ころまでの間に、その頭部を中学校正門前に投棄し、もって、死体を損壊し、遺棄したものである⁽¹³⁾。

このような非行事実を認定した神戸家裁の決定により、少年Aは医療少年院へ送致されることとなった。しかし、またなにゆえに、少年Aはこのような極悪非道の行為に及んだのであろうか。その原因を解明することは、もちろんきわめて難しいことであるだろう。もしかすると真の原因解明になっていないのかもしれないとしても、われわれがわれわれなりに原因を想像することができるための一つの手がかりとして、次に、再び多少長くなるが、同年10月2日に神戸家裁に提出された少年Aの精神鑑定結果（概要）を見てみることにしたい。

非行時、現在ともに顕在性の精神病状態にはなく、意識清明であり、年齢相応の知的判断能力が存在しているものと判定する。

未分化な性衝動と攻撃性との結合により持続的かつ強固なサディズムがかねて成立しており、本件非行の重要な要因となった。

非行時ならびに現在、離人症状、解離傾性が存在する。しかし、本件一連の非行は解離の機制に起因したものではなく、解離された人格によって実行されたものでもない。

直観像素質者であって、この顕著な特性は本件非行の成立に寄与した一因子を構成している。また、低い自己価値感情と乏しい共感能力の合理化・知性化としての「他我の否定」すなわち虚無的独我論も本件非行の遂行を容易にする一因子を構成している。

また、本件非行は、長期にわたり多種多様にしてかつ漸増的に重篤化する非行歴の連続線上にあって、その極限的到達点を構成するものである。

家庭における親密体験の乏しさを背景に、弟いじめと体罰との悪循環の下で「虐待者にして被虐待者」としての幼時を送り、“争う意志”すなわち攻撃性を中心に据えた、未熟、硬直的にして歪んだ社会的自己を発達させ、学童期において、狭隘で孤立した世界に閉じこもり、なまなましい空想にふけるようになった。

思春期派発来前後のある時点で、動物の嗜虐的殺害が性的興奮と結合し、

これに続く一時期、殺人幻想の白昼夢にふけり、現実の殺人の遂行を宿命的に不可避であると思ひこむようになった。この間、「空想上の遊び友達」、衝動の化身、守護神、あるいは「良心なき自分」が発生し、内的葛藤の代替物となったが、人格全体を覆う解離あるいは人格の全面的解体には至らなかった。また、独自の独我論的哲学が構築され、本件非行の合理化に貢献した。かくして衝動はついに内面の葛藤に打ち勝って自己貫徹し、一連の非行に及んだものである。

この少年は、本件一連の非行が予後のきびしさを示唆する種類のものであり、また現在まことに恬然としているとはいえ、年齢的に人格がなお発達途上にあることを考慮すれば、罪業感や良心が今後自覚される可能性が全くないとはいえず、その自覚をとおして更正に希望を託す他はない。この直面化には熟練した精神科的接近法を要する。しかし、良心あるいは罪業感は一刃の刃であって、直面化の過程で、分裂病、重症の抑うつ状態、解離性同一障害等の重篤な精神障害が生起する可能性もある。少年は今後これらの疾患の好発年齢に入る。さらに少年に対して法を無視した制裁の危険も否定できない。以上すべてを考慮すれば、隔離状況で今後の精神的変化に対応できる環境での処遇が望ましいと思料する⁽¹⁴⁾。

この精神鑑定結果を見れば、断定することはできないにしても、少年Aが一連の事件を起こしてしまった原因が透けて見えてくるように思われる。不幸なことに、「性衝動」と「攻撃性」が未分化のまま結合してしまったというのである。その結果、「持続的かつ強固なサディズム」が、前々からずっと出来上がっていたとされる。それが非行の重要な要因であると考えられている。しかし、またなにゆえに、そのようなことになってしまったのか。精神鑑定結果から推察すれば、最も根底にある原因は幼時における「虐待者にして被虐待者」という強烈な体験にあって、それがもとでAの人間としての出発点の部分が狂ってしまい、そのためにAは徐々に道を踏み外していったと言えるのではないだろうか。

世界的に見ても、十代の少年の性的サディズムの克服例は、これまでに報告されたことがないという。そのようなほとんど未知の領域の問題ではあるが、ある精神科医は、少年Aについて次のような分析をしている。「幼い頃、母親に厳しく躰けられたAは、母親から愛情をかけられたと感ずることができなくなっていた。自分の異常性を母親に相談できないところか、対人面で一種の発達障害が見受けられる。彼は異常な自分には生きる価値がないと思う一方、弱

肉強食の独自の思想を構築していった。弱者は殺されてよいという、殺人衝動の正当化です。Aの脳は、性中枢の発育が未発達でした。第二次性徴期に攻撃中枢と性中枢が未分化のまま、攻撃中枢だけが発達したのです」⁽¹⁵⁾。通常の健康な男性の場合、まず攻撃性の中枢が発達して暴力的になり、その後性的な中枢が発達するという順序で変化が生じるという。しかし、少年Aの場合は、攻撃性の中枢だけしか発達しなかった。関係者は、「100%、男子としての性中枢が未発達だったことによる問題」⁽¹⁶⁾が原因であると分析したともいう。

少年Aの精神が病んでいった原因はもちろんいろいろとあって、それが複合的に絡み合っていたのではあろう。しかし、そもそもAがそうってしまった大きな原因の一つは、母親にあると指摘されてもいた。Aは、幼児期に、母親から「スパルタ教育」、すなわち「広義の虐待」を受けていた。一般に、親からの価値観の押し付け、差別、虐待、いじめなどの幼少時の経験がきっかけとなって非行に走る少年が多いのは、周知の事実である⁽¹⁷⁾。だとすれば、精神鑑定結果で言われた「虐待者にして被虐待者」というのは、時間的な順序と因果関係から言えば、本当は“被虐待者であるがゆえの虐待者”ということの意味していると受け取らなければならないのではないだろうか。もちろん、これは悪循環である。

その悪循環の起源を探り当てる目的で、少年Aの生い立ち（生育環境）をごくかいつまんで列挙してみる⁽¹⁸⁾。もちろん、これは恣意的な列挙にすぎない。

- Aは男ばかりの三人兄弟の長男である。年子で次男が、3年後に三男が生まれた。年子の次男に母親が母乳を与えているのを見て、Aはよく泣いたらしい。それは、ごく普通に見られることであるけれども、精神鑑定にあたった医師は、Aの場合、「母子一体関係の時期の短さが、Aに最低限の満足を与えなかった」と分析している。
- 三男が誕生して間もなく、Aが突然「足が痛い、足が痛い」と言い出した。レントゲンを撮ってもらったが、どこにも悪いところは見当たらなかった。これも、よくあることであろう。診察した医師は、「長男をもっとかまってあげてください。おそらく精神面から来る症状でしょう」と言った。母親はその頃、小児喘息持ちの三男の世話もあって、Aをほとんどかまっていなかった。医師の助言を母親が守ると、症状は二、三週間で消え、その後Aは「足が痛い」と言わなくなった。
- Aが幼稚園児の時、砂場で遊んでいて、友達に玩具を取られたが、モジモジして何も言い返せなかったことがあった。その時に、母親が「取られたら取り返しなさい！」と強く言ったという。この時期、Aは自分をいじ

めた相手ではなく、自分よりも弱くて小さな女の子の頭を石で叩いたこともあるという。母親に「強くなりなさい」と言われ、自分もそうなりたしたが、性格や生活環境が異なる子どもたちとの集団生活において、Aは厳しい現実を味わった。

- 幼稚園の音楽会で緊張しないようにと、Aに母親が「緊張するなら周りの人間を野菜と思ったらいいいからね」と言った。この類の言葉かけは必ずしも珍しいものではないが、後にAは犯行声明で、人間を「野菜」にたとえた。
- この頃、Aは特に体格がよかったわけでもなかったが、将来、ボクシングの選手になりたいと言ったことがある。
- またこの頃、Aは、母親から叱責されている時に、自分が泣き出すと、母親の怒りが収まることを知ったという。そして、母親に怒られると、悲しいという感情がないにもかかわらず、Aは泣くようになった。そのようにして、Aは母親の叱責から逃れる方法を会得した。
- 小学校2年生になると、Aは弟たちと一緒に少林寺拳法の道場に通い始め、6年生まで続けた。Aが2年生の時の担任教師の記憶では、当時のAはちょっとおとなしくてやんちゃな子どもの一人にすぎなかったが、気になることがあった。宿題や学用品を忘れてたりすることが続いたので注意したところ、Aは「やめて、やめて。お母さんが怖いから（家には）言わないで」と激しく抵抗した。
- 小学校3年生の時、Aは、Aが母親を怖がっていた証拠としてマスコミや精神医学の専門家が取り上げた二つの作文、「お母さんなしで生きてきた犬」と「まかいの大ま王」を書いている。当時の担任教師は、「お母さんなしで生きてきた犬」の作文を学級通信に転載する際、「ぼくもお母さんがいなかったらな。いやだけどやっぱりぼくのお母さんみたいのがサスケのおかあさんだったらわからないけど。やっぱりかわいそうだな」という最後の部分を削除していた⁽¹⁹⁾。
- またこの頃、兄弟3人で喧嘩しているのを見かねた父親が、Aに手を振り上げて止めると、Aの目は突然虚ろになり、宙を見つめ、「お母さんの姿が見えなくなった。以前住んでいた家の台所が見える。前の家に帰りたい、帰りたい」と震えながら言ったという。母親が医師の診察を受けさせると、「過干渉による軽いノイローゼ」という診断がなされた。医師は母親に、「親の躰けが厳しすぎる。早まって口出ししたり、過去のことをくどくど言わず、子どもの性格を理解した上で躰けをしなさい」と指導した。その後、Aは以前にも増して、自分の心を悟られないように、つねに仮面をかぶっ

て親に対応し、決して甘えようとはしなかったという。

- Aが逮捕される約2ヶ月ほど前の平成9年4月頃に、Aは「懲役13年」という作文を書いている。小学校5年生になったばかりの5月中旬に祖母が亡くなった頃から、Aは「自分は明らかに人とは違う」「自分は異常だ」ということを自覚するようになった。それ以来、Aは抑えきれない衝動に苦悩する日々を過ごし、Aにとっては、これまで生きてきた期間は「懲役」だと思われるようになった。

少年Aの母親は、「Aだけ格別厳しく躰けたという記憶はありません」⁽²⁰⁾と言う。しかし残念ながら、これはあくまで母親の主観的な記憶である。また、たとえ実際に母親が厳しく躰けるというようなことを一切しなかったとしても、それはまったく意味をなさない。母親の躰けをAがどのようなものとして受け取ったかがすべてである。Aの記憶としては、自分が虐待され続けたという記憶しか存在していないのではないかと考えられる。Aにとっての母親は、「閻魔大王でも手が出せない魔界の大魔王」だったのである。Aの生い立ち（生育環境）から言うならば、実際の時間の流れ、そしてまたAの記憶における事柄の流れの順序の両方において、Aが母親から虐待を受けたという方が、つねに先にあったと言えるのではないだろうか。

しかし、少年Aの生い立ち（生育環境）に類似した例は、実際、他にいくらかでもあるのではないかとさえ、それはあるだろう。そのすべての例がAの場合のような結末になってはいないのではないかという指摘も、正鵠を得ているだろう。どのように考えればよいのだろうか。きわめて常識的な考えにしかすぎないのだが、類似の例とは異なって、Aの場合はいわゆる感受性が極端に鋭敏であったために、極端な結末につながったと考えられるのではないだろうか。まずは、感受性の“程度”の問題があるのではないだろうか。さらに、そのことが脳の発達障害につながるかどうかという問題があると思われる。つまり、生い立ち（生育環境）から受ける影響の“質”の問題があると思われる。Aの場合、そのようなきわめて特殊な“程度”と“質”の組み合わせによって、一連の凶行がもたらされたと言えるのではないだろうか。

とはいえ、この事件の根本原因は、人間というものは、自分よりも強い者から虐待（いじめ）を受けると、その後、今度は逆に、自分よりも弱い存在に対して虐待し返す（いじめ返す）ようになるという点に潜んでいるように思われる⁽²¹⁾。次の事例では、三世代にわたる“虐待の連鎖”が推定される。

4 R子の場合⁽²²⁾

R子(15歳)は、入学したばかりの女子高校生である。R子は、“他人からいじわるをされていると感じる”“自分の後ろに誰かがいるような気がする”“イライラする”“気が散りやすい”と訴えて受診した。その後まもなく、この訴えの背後には、重大な事件があったことが判明した。R子が中学校2年生だった頃から、R子と継父の間に性的関係が続いているということが、最近になって発覚したというのである。R子が高校に入ってから、継父の性的接近に抵抗するようになったために、そのことが表面化したのだった。

それに加えて、その事件には前史があることもわかった。R子が4歳の頃すでに、R子はこの継父に性的ないたずらをされていたのである。痛くて涙が出たが、殴られるので、怖くて言い出せなかったそうだ。その後にも、いろいろなことがあった。小学校1年生の時、下校中の男子中学生に全裸にされたこと、小学校4年生の頃から、後ろに誰もいないのに他人がいる感じがするようになり、それが出没していること、他人との触れ合いをいじめられているように感じてきたらしいこと、中学校2年生のはじめの頃、同級生との間に性体験があったこと、そのことが周囲で噂されたために登校できなくなっていたことなどである。

さらに注目すべきは、この事態が三世代の葛藤を反映しているのではないかと思われる家族的背景があったことである。R子の母親であるTが、Tの中学卒業と同時に、Tの母親(R子の祖母)が連れてきた男性(Tよりも12歳年上であった)と結婚させられていたのである。Tは、「自分は親に抑えつけられて育ったので、反抗できなかった。加えて、両親に喧嘩が絶えず、いつも恐怖心があった。いやいやだったが、言われるままに結婚した」と述べている。

結婚後、Tとその夫は、Tの両親と同居していた。Tの母親(R子の祖母)は当時まだ42歳という若さで、Tの母親とTの夫の両者の仲がよかっただけに、この両者の関係を疑う噂が周囲で流れたことがあった。

Tは、18歳の時にR子を生む。しかし、Tの夫(R子の実父)は、Tの両親(R子の祖父母)の仲の悪さに圧倒されて、外で遊ぶことが多くなり、次第にTの母親(R子の祖母)とも折り合いが悪くなり、結局Tと離婚した。この時、Tは22歳、R子は3歳だった。

その翌年、Tは、Tの妹の友人の兄と再婚した。その再婚相手が、現在のTの夫であり、R子の継父である。Tの再婚後、Tとその夫とR子の3人は、これまたTの両親と同居していた。R子の継父は、結婚後しばらくすると、R子に性的いたずらをするようになった。R子には性器が痛くて泣いた記憶があるという。また、R子に従わないと、継父はR子を殴ったという。

この継父は、妻のTがお産のために入院するたびに抑うつ的になったり、“実家に帰ると敵ばかりいる”と言ったり、人の顔色をうかがったりする態度が多かった。ただし、R子の診察時に見たかぎりでは、この継父に精神病的なところはなかった。

その後、Tの両親との同居を解消して別々に住むようになってしばらくすると、R子と継父の間に関係ができるようになった。その背景には、R子が不登校になったことと、Tが妊娠して留守をするようになったことが重なったということがあったらしい。

さらに、この事例で忘れてはならないことは、R子の母親も祖母もR子をよく叩くということである。R子は些細なことでよく叩かれたという。この家系では、母子間（親子間）の情緒的問題の解決に、暴力が使用されやすい「環境」があったようである。少なくとも三世代にわたる“虐待の連鎖”が推定される。しかし、またなにゆえに、そのようなことになってしまったのか。その原因の一つは、この事例で顕著に浮かび上がっているように、この家族の成員のそれぞれに「人格的成熟さ」を認め難いという点にある。「暴力的解決は、人格の未成熟さを示す指標といってよい」⁽²³⁾のである。

それでは次に、親の人格が未成熟だとどうなるかということを明らかにした一つの事例を見てみることにしたい。

5 人格未成熟のある若夫婦の場合⁽²⁴⁾

次の事例は、スイスの思想家であるアリス・ミラー⁽²⁵⁾が「子どもを辱めると、弱者に対する軽蔑、そしてその成行き」がどうなるかを論じるために使用している「日常生活からの実例」のうち、最初に挙げられている例である。

ある日のこと、ミラーが散歩をしていたら、彼女の前をある若夫婦が歩いていた。二人とも大柄だった。そのかたわらを、2歳くらいの小さな男の子が、歩きながらぐずっていた。この若夫婦は、今しがた売店で「棒付きアイスキャンディ」（以後、アイスと省略）を買ったばかりで、それをおいしそうにしゃぶっていた。その男の子は、自分もそのようなアイスが欲しくてたまらなかったようだ。

母親は、「ほら、ママのを一口かじっていいわよ。全部は冷たすぎますからね」とやさしく言った。男の子は、かじろうとはしないで、手を伸ばしてアイスをそっくり取ろうとする。すると、母親は、ひょいとアイスを遠ざけてしまう。男の子は、絶望のあまり、泣き出してしまった。

今度は、父親との間で、まったく同じ状況が繰り返された。父親が、「ほら、坊や」とやさしく言った。「パパのをかじってもいいよ」。にもかかわらず、男の

子は、「いやだ、いやだ」と叫んで、また歩き出した。

男の子は、自分で何とかして気を紛らそうとしていたけれども、何度も戻ってきては、うらやましそうに、また悲しそうに、上を見上げていた。見上げると、大人二人が満足して、うち揃ってアイス进行を味わっている。両親は何度も代わる代わるに、男の子が一口かじるように勧めた。そのたびに、男の子はその小さな手をアイスの方に伸ばした。すると、宝物をもった大人の手は、引っ込められるのだった。男の子が泣けば泣くほど、両親は楽しそうだった。

二人の大人は、大笑いをせざるをえなかった。自分たちが笑えば、男の子の気持ちを引き立てられると思っていた。「ほら、そんなに大事なことはないじゃないの。なぜ君はそこで大騒ぎをしているんだ」と声をかけていた。

男の子は、地面にしゃがみこんだ。背中を両親に向け、背後の砂利を母親の方に向けて投げ始めた。だが、男の子は、不意に立ち上がって、両親がまだそこにいるかどうか、不安げに見やるのだった。

父親は自分のアイスをすっかりなめてしまうと、残った「棒」を男の子に与えて、すたすた歩いて行った。男の子は、胸をはずませ、「棒」をなめてみた。そして、それをしげしげと眺め、投げ捨てた。もう一度拾い上げようとしたが、やめた。がっかりしてしまって、心底、淋しそうにしゃくり上げて、いたいけな体を震わせた。それから、健気にも、両親の後から、ちょこちょこ歩いて行った。

以上がミラーが目撃した事例である。ミラーには、この男の子が「口唇期欲動」で欲求不満を起こしているのではないのは、はっきりしていると思われた。なぜならば、もしそうであれば、この男の子には、アイスを一口かじるチャンスは何度もあったからである。つまり、この男の子の欲求不満は、“アイスをなめたかったのに、なめさせてもらえなかった”という点から起きてきているのではない。そうではなく、この男の子は、そのナルシズム的欲求において絶えず屈辱を受けたために、欲求不満にさせられたのである。すなわち、“両親と同じように、自分もアイスを手のなかに持ちたかった”のに、そのことを両親が理解してくれなかったと男の子は捉えているのである。それだけではない。男の子は、“両親と同じように、自分もアイスを手のなかに持ちたい”という自分の欲求が、両親によって「笑い物」にされたと捉えているのである⁽²⁶⁾。

男の子の両親は、男の子にやさしく話しかけるなど、一見、特に悪い両親ではないように思われる面もないわけではない。しかし、両親とも、笑いながら突っ立っていた。あんなに明らかだった男の子の絶望にもびくともしない態度を取っていた。しかし、またなにゆえに、そのような態度を取ることができたのだろうか。それは、要するに、この両親には、“両親と同じように、自分もア

イスを手のなかに持たい”という男の子の欲求がまるで理解できなかったという点に尽きる。この両親には、「共感の欠如」というものが顕著に見られる。それでは、またなにゆえに、この両親は共感的理解力を欠いているのだろうか。ミラーは、この謎は次のように考えなければ説明がつかないと考えている。つまり、両親の方も、まだ一人前ではない「子ども」であると見なさなければならぬのである。

人格が未成熟の人間は、自分よりも弱い存在を虐待する。したがって、自分たちの子どもをもってはじめて「自分よりも弱い存在」をもつことができた“人格が未成熟の親”は、そこでやっと「自分たちの方が強い」と感じるができるようになり、自分でも知らないうちに、子どもを虐待し始める。ミラーは、幼い時に侮辱され、笑い者にされた経験のない人間などいないと考えている。そのような人間が人格未成熟のままだと、たとえその人間が表向きは「大人」の姿形になったとしても、「自分よりも弱い存在」に対して、チャンスさえあれば「順送り」として虐待し返すということになる。そのようなわけで、ミラーは、例の男の子が、20年後には自分の子どもに対して、あるいはもっと早くは弟や妹たちに対して、「アイスクャンディ事件」をもう一度引き起こすのは、疑いの余地のない事実であると言いつけている。その場合、例の男の子が「所有者」の方にまわっているのは、もちろんのことである⁽²⁷⁾。

また、ミラーは、この「アイスクャンディ事件」の実例に典型的に見られるように、エディプス期の苦痛は、わが子に押し付けてしまえば「捨て去る」ことができるかと分析している。親が子どもに対して「わかるかい。私たちは大きいのだ。私たちは許されているのだ。お前には『冷たすぎる』からね。お前が大きくなったら、お前も私たちと同じように思う存分楽しんでいいんだよ」というメッセージを強力に発することによって、親は自分たちが自分たちの親から同じようにして受けた「屈辱の仕返し」をして、“鬱憤晴らし”をしているのである。たいていの親は、自分でも知らないうちに、自分の子どもに対して、そのような仕返しをして、その結果、“虐待の連鎖”が出来上がるのではないかと考えられる。虐待を受けた子どもには、その“程度”と“質”によって、いろいろな症状が出てくるであろうが、たいていは「性的倒錯」か「強迫神経症」が現れる。そして、悪いことに、このような症状がもっている言語は十分に暗号化されているために、そこから犯人の名前が洩れる心配はないという⁽²⁸⁾。

ところで、以上の問題は、主として親子間、あるいは家族間における問題であった。そのような問題をもっと大きな領域で捉えると、どうなるであろうか。次の事例は、そもそも“教育”などというものが“虐待の連鎖”を生み出している“張本人”ではないかということを明らかにしようとしたものである。

6 ユルゲン・バルチュの場合⁽²⁹⁾

次の事例もまた、アリス・ミラーが取り上げている事例である。1960年代の終わりに、当時の西ドイツで、ある情痴犯罪事件の裁判がたいへんな話題になったことがあるそうだ。ユルゲン・バルチュは、その被告だった。1946年生まれのこの青年は、16歳から20歳の間に、いく人もの子どもに危害を加え、いくつもの殺人事件や殺人未遂事件を引き起こした。その残虐性には、筆舌に尽くし難いものがあった。(この点、少年Aの場合と類似している。)きわめて長い期間にわたってバルチュと手紙のやりとりをして、「ユルゲン・バルチュという人間」を理解しようと努力した人物として、パウル・モールという人物がいる。1972年に出版されたけれども、今は絶版になっているバルチュの自伝『ユルゲン・バルチュの自画像』のなかで、このモールが次のような事実を報告している。多少長くなるが、ミラーの著書から引用してみたい。

1946年11月6日、ある肺結核にかかった戦争未亡人とオランダ人の季節労働者の間にできた私生児として生まれたカール＝ハインツ・ザトロツィンスキー—後のユルゲン・バルチュ—は、母親が断りなく予定の日より前に病院を出て行ってしまったため、病院に置き去りにされた。母親はその後2、3週間で死亡した。彼の誕生後1、2ヵ月目に、ゲルトルート・バルチュという、エッセンの金持ちの肉屋の夫人が同じ病院に入院し、「子宮全摘出」手術を受けた。彼女も夫も、病院に置き去りにされたこの子どもを養子にすることを決めており、その決意は、児童福祉局の養子縁組係がその子の血統に疑わしい点があるとしてこの縁組に疑義をさしはさみ、7年後まで正式な縁組を許可しなかったにもかかわらず、変わらなかった。この新しい両親は、子どもが成長し始めると、この子どもをいつでも家の中に閉じ込め、他の子どもたちから完全に切り離してしまった。この子が養子だと誰かから聞くといけないというので。父親が二番目の店を（ユルゲンにできるだけ早く自分の店を持たせてやるつもりで）開き、母親がそこで働くようになると、まず祖母が、その後は何人もの女中が子どもの世話をするようになった。

10歳になるとユルゲン・バルチュの両親は彼をラインバッハにある児童寄宿学校に送ったが、そこにはおよそ20人くらいの子どものが預けられていた。この比較的居心地のよい環境から、12歳の彼はあるカトリックの学校に移された。この学校には300人の男子生徒がおり、その中には問題児もいく人が混じっていたのだが、その男の子たちが厳格な軍隊式の訓育を受けていたわけである。

ユルゲン・バルチュは1962年から1966年の間に4人の少年を殺害し、殺害

未遂に終わった例は100を数えると言われる。殺し方は一回一回少しずつ違っていたが、大筋は常に同じであった。すなわち、一人の少年をランゲンベルクのヘーガー通りにあった昔の防空壕、これはつまりバルチュ家の住いのすぐ近くなのだが、に連れ込むと、彼はその子どもを殴って言うことを聞くようにさせ、ハムを縛る紐でその子を縛り、その子どもの性器を弄んで、その際時として自分も自慰行為を行い、首を締めるか殴り殺すかしてその子を殺し、体を切り離し、胸および腹腔内は完全に空にした上で残りを埋めたのである。いくつかのヴァリエーションというのは、屍体を切り刻むとか、手足を切り取る、首を切る、性器を切り取る、眼球をほじくり出す、臀部および太股の肉を切り取る（そしてそのにおいを食ったという）およびうまくはいかなかったが肛門性交の試みなどである。予審および審理中に彼自身が行った、並はずれて詳細にわたる証言中、バルチュは、性的興奮が最高潮に達したのは自慰行為を行った際ではなく、屍体を切っている時で、その時には一種の継続的絶頂感を感じていたのだと強調している。4番目の、最後の殺人の際、彼はとうとう、以前から最高の目標として思い描いていたことをやり遂げた。彼は犠牲者を杭に縛りつけると、泣き叫ぶ子どもをそのまま、つまり前もって殺すことなく、バラバラに切り刻んだのである⁽³⁰⁾。

しかし、またなにゆえに、バルチュはかくも残酷な挙に出なければならなかったのだろうか。彼もまた、ひどく虐待されていたのである。それも、家庭と学校の両方においてである。ミラーがバルチュの自伝から引用している“被虐待の記憶”だけでも、相当の数にのぼる。そのすべてに言及することはとてもできないので、家庭と学校での“被虐待の記憶”を一つずつ引用することにしたい。

僕を他の子どもたちとつき合わせてくれなかったでしょう、だから僕は学校で、情けない負け犬になってしまったんだ。僕のことをあの黒服のサディストのところへやったりしない方がよかったんだし、あの神父さんが僕にひどいことをして僕が逃げ出してきた時学園に送り返したりしちゃいけなかったんだ。でもそんなこと知らなかったんだよね。お母さんは僕が11か12だった時、マルタおばさんがくれるって言ってた性教育の本を炉の中に放り込んだりしちゃいけなかったんだ。どうしてお父さんもお母さんも20年の間一回だって僕と遊んでくれなかったんだ？ でもこんなことは他の家でも起きていることかもしれないね。僕は少なくとも望まれてもらわれてきた子だったんだね。20年間そんなこと全然気がつかなかった。今日になってそれを教

えてもらっても、もうどうしようもなく手遅れだけだ⁽³¹⁾。

僕たちは<シンピュー>って呼んでたけど、寮長のピュットリッツ神父てのはひどい人でした。でもそれだけじゃない、とにかくマリーエンハウゼン はまるで地獄でした。この地獄はカトリックの地獄だったわけだけど、カトリックでも話は同じだったんです。僕があそこのことで思い出せるものと言ったらろくなことはありません。神父服着た奴に折檻されたこと。学校の授業中でも、聖歌隊の練習中でも、それから教会でも変わりなくぶたれたな。サディスティックな罰のこと（校庭に寝巻きのまま生徒を円く並ばせ、気をつけの姿勢のまま何時間でも、誰かが倒れるまで立たせておく）。してはいけないはずなのにやらされた、炎天下での畑作業、それも午後いっぱいいく週間も続くんです（干草積み、じゃがいも掘り、かぶ抜きなど。手ののろい子どもは棒で打たれました）。生徒同士の（成長のためには不可避な！）言うもおぞましい<醜行>とやらに対する恐ろしいまでの怒り方。食事時、定刻以降に強制される不自然なく沈黙>。そして生徒たちへの、わけのわからない、不自然な命令。たとえば<台所の下働きの女中を見でもしたら、鞭を喰らうんだからそう思え>という具合⁽³²⁾。

いみじくも、「でもこんなことは他の家でも起こっていることかもしれないね」とバルチュ自身も言っているように、こんなことは、たいての家庭や学校で珍しくもなく起こっていることであるかもしれない。もしそうだとすると、同じように虐待を受けていても、ある特定の人間だけが極端なかたちで虐待し返すようになり、それ以外の人間はそれほどでもない程度にとどまるのは、なぜなのだろうか。このことを考えるために適切だと思われる切り口がある。

先述のパウル・モールの次のような経験が、この謎を解く一つの出発点になる。モールは、アメリカで育った人物であった。当時は、モールが西ドイツで暮らすようになってから30年ほど経っていたようだ。このモールは、バルチュの初審の間に出会った所轄官庁の官吏たちのあり方にひどく驚いたというのである。バルチュが凶行に及んだ根源的な原因として“生育環境の問題があるのではないか”ということを示唆する状況をこれほどはっきりと目の当りにしながら、そのことを、裁判にかかわっている人々のうち、ただの一人も理解していなかったというのである。外国育ちの自分にはすぐにわかったことが、この人々には全然わからないのはなぜか。モールには、そのことが理解し難かったのである。

いかなる法廷もそれが属する社会の規範と禁忌の支配下にあることは、言う

までもない。それゆえに、“社会が見てはならないということにしていること”については、その社会の裁判官も検事も見ることが許されないのである。しかし、そのようなことでよいのだろうか。鑑定人にしても裁判官にしても、“社会の見方”ではなく、“一人の人間としての見方”で事件を見つめる必要があるのではないだろうか。しかし、それはきわめて困難なことである。なぜならば、彼らもまた、おそらくユルゲン・バルチュと「同じような教育」を施され、幼い頃からそのやり方を「理想化」し、それに適応した「排泄機構」をうまく見つけることによって何とか「成人した」ために、その時点で彼らの“一人の人間としての見方”などはすっかり消え去ってしまい、彼らは“社会の見方”なるものに完全制覇されてしまっていると考えられるからである。

ミラーは、「そのようにして成人したこの人たちが、もし自分たちの教育の残酷性を今になって認めたとしたら、自分たちがこれまでかかって作りあげてきたすべては崩壊してしまうではありませんか？」⁽³³⁾と分析する。そしてミラーは、カタリーナ・ルーチュキイの言う「闇教育」(schwarze Pädagogik)の最大のねらいの一つを白日の下にさらし、さらに分析を加えている。この部分は本稿の問題設定にとって本質的な部分であるので、引用によってはっきりさせておく必要があると思われる。

「闇教育」の最大のねらいの一つはこのようにして、子ども時代に味わった苦しみを見ることも認めることも判断することも全然できなくしてしまうことなのです。バルチュの鑑定書には繰り返し、「他の人間も」そのように教育されたが、性犯罪者にはならなかったという、さもありなんと思わせる文章が出てきます。このようにして既存の教育体系の擁護が行われ、個人として時たま生まれる「異常な」人間がその教育を受けた時犯罪者になってしまったのだとほのめかしているわけです。

ある人の子ども時代が「特にひどく」他の人の「それほどひどくない」と言うための客観的な基準があるわけではありません。ある子どもが自分の運命をどのようなものとして生きているかは、その子の感受性によって決まるのですが、感受性というのは一人一人違っているものですから。そのうえどのような人の子ども時代にも、外からはわからない僅かな救いがあることもあり逆に絶望もあります。このような運命的と言える条件はほとんど変わる気づきもありません⁽³⁴⁾。

われわれはすでに少年Aの事例分析をわれわれなりに独自に試み、その凶行の原因を“教育”を含めた“生育環境”に求めることから出発していたが、そ

これからここまでの歩みは、ミラーのこのような考え方と奇しくも一致していたと言っているのではないだろうか。ミラーは、ユルゲン・バルチュの場合に関して、次のようにはっきりと結論づけている。

私が、バルチュ夫人を非難しているとお取りになる方があるとしたら、それは私の意図の誤解であり曲解です。私は何よりもどのような形の道徳的判断も行わず、純粹に原因と結果だけを示そうと考えているのですから。つまり、殴られた子どもたちは殴るようになり、脅かされた者は脅かし、傷つけられた者は傷つけるようになり、魂を殺された者は他の者を殺すようになるということです⁽³⁵⁾。

要するに、教育、あるいは闇教育は、途轍もない威力をもっているのである。そのことを、われわれは今更ながらも改めて認識し直さなければならないのではないだろうか。家庭や学校や社会で、いじめが起きる、窃盗事件が起きる、傷害事件が起きる、果ては殺人事件が起きるなど、数え上げ始めればきりがなが、いずれにしても、あらゆる結果には原因がある。そして、教育もその原因の一つになっている。しかしまた、教育を受けなければならないということは、われわれ人間にとって、とりわけ子どもにとっては、不可欠のことである。われわれにとって、“教育”は“絶対的所与”として与えられるとも言えるであろう。しかし、“絶対的所与”は“教育”の領域にとどまるのだろうか。もしかすると、もっと広い領域で、すなわち広義の“歴史”や“文化”の領域での諸問題が“絶対的所与”としてわれわれに対して与えられている場合もあるのではないだろうか。そのような場合を次に見てみることにしたい。また、そのような場合では、そもそも“人間が存在する”ということの“本質”そのものがはらむ“根源的問題”が浮かび上がってこざるをえない。

7 おとぎ話の場合⁽³⁶⁾

この問題もまた、アリス・ミラーによって論じられている問題である。すでに見たように、社会から“正常である”と認められるように成人した“大人”のものの見方や考え方にはその社会のものの見方や考え方がすっかり入り込んでいるために、大人は「世界が本当はどういうものであるか」ということを虚心坦懐に見ることができなくなっている。それに反して、「世界が本当はどういうものであるか」ということを幼い子どもは知っているのではないかとミラーは考えている。

幼い子どもは「悪」をあからさまなかたちで体験する。そして、その認識を

無意識のなかにしまい込む。この幼児体験が、大人になって空想する場合の源泉になるが、大人の場合は、たとえそれが空想であっても（空想とはいえ、それはものの見方や考え方とは無縁ではないので）、たいていは社会から一種の「枷」がはめられている。そして、この空想が、おとぎ話、伝説、神話などのかたちをとって姿を現す。大人はこのようなかたちで、もはや忘れかけていた「子どもだけが知っている人間の残虐性の真の姿」に迫ろうとする。

現実世界では、すべての事柄がハッピー・エンドになるとはかぎらない。現実世界では正義が行われることはむしろ少なく、善人が報われることは稀で、目を覆わんばかりの残虐行為が罰せられることもなくまかり通っていることさえある。このような“事実”をストレートに物語に仕立てることに、やはり躊躇がある。なぜならば、そのようなことが当然のことで、しかもまかり通ってよいことだとなれば、社会の規範がゆらいでしまうからである。そこで、“本当の話”にも、社会から一種の「枷」がはめられることになる。しかし、「おとぎ話」という言葉には“非現実的な話”という意味もあるので、たとえ“本当の話”をしたとしても、それがおとぎ話というかたちで語られると、誰もそれを攻撃する気にはならないのである。

おとぎ話のこのような性質を利用して、ミラーは「ルンペンシュティルツヘン」の物語から思いついたことを書き連ねる。ミラーは、「この解釈こそ正当だ」などということを言いたいわけではなく、一種の「思考遊戯」をしたいのだという。それは、彼女が考えていることを、われわれにわかりやすいかたちで伝えることができるようにするためである。しかし、われわれがそのことを理解するためには、まず、このおとぎ話がどんな話なのか、ちょっとは知っていなければならない。そこで、多少長くなるが、ミラーの著書からこの話をまとめてみたい。

粉屋がいた。この粉屋は、自分の王様をすばらしい王様だと思い、感心していた。しかし、自分の方が王様から感心してもらえる可能性はなかった。少なくとも認められ、まともに相手にしてもらえる可能性も、何か特別に王様の役に立つようなことをしないかぎり、まったくなかった。

そこで、粉屋は、王様に向かって、「自分の娘は藁を紡いで金にすることができる」と吹聴することを思いついた。すると、王様はその娘を城に連れてこさせ、娘を藁でいっぱいの部屋に閉じ込め、娘に紡ぎ車と糸巻きを渡して、「明日の朝までに、この藁を金に紡いでおかなかったら、命はないぞ」と娘を脅した。

粉屋の娘は、その部屋に座って泣いていた。「いったい、どうやったら、で

きるはずもないこんなことが、できるのかしら……」「でも、それをしなければ殺されてしまうのね……」この娘は、他の多くの子どもたちがしなければならないのと同じように、生き延びていくことができるためには、「奇蹟」を行わなければならない羽目になった。

突然、娘が閉じ込められた部屋に、小人が現れた。この小人にとっては、「藁を金に変える」ことなど、朝飯前だった。そして、それを娘のために、本当にもやってくれた。ところが、王様は欲深で、部屋いっぱいの金で満足しなかった。娘はまた同じ羽目に陥ったけれども、再び小人が現れて、娘を助けてくれた。

調子に乗った王様は、「もう一度同じことをやってくれば、お前を妃にしよう」と娘に約束した。それは、王様が、「この娘が藁から金をつくれるかぎり、この娘より金持ちの女は世界中探してもいないだろう」と考えたからであった。

小人は、また娘を助けてくれた。だが、今度は、見返りを要求した。娘と王様が結婚して「最初にできた子ども」をくれ、というのが小人の要求だった。結局、娘は王様の妃に納まり、やがて「かわいい子ども」が生まれた。すると、小人がその子どもをもらいにやって来た。

若い王妃は動転して、「子どもさえ勘弁してくれば、どんな宝物でもあげますから」と哀願した。が、藁を金に紡ぐことのできる小人にとって、今更そんな宝物に何の用があらうか。「生きている子どもに優る宝などない」と小人は、王妃の哀願をつっぱねた。

とはいえ、小人は王妃のことが気の毒になったのか、こんなことを言い出した。「もし、お前が3日のうちに、わしの本当の名前を当てることができたら、子どもを連れて行くのは勘弁してやろう」

もちろん、王妃には、小人の名前など、わからなかった。ところが、偶然のきっかけから、王妃は小人の名前を知ったのであった。ある伝令が森のなかで小人を見かけ、小人が歌を唄い踊っているところを見た。そのことを、その伝令が王妃に話したのである。伝令は、小人の歌をちゃんと聞いていた。

「俺様の名がルンペンシュティルツヒェンだと知っている奴など一人もない。こいつあなんて豪気なことだ」

王妃の部屋に来た小人は、自分の名前がわかってしまったことを知ると、怒りのあまり右足で地面をたたきつけた。その勢いで、小人の右足は、地面にめり込んでしまった。憤りのあまり我を忘れて、小人は、残った左足を両手でつかむと、我と我が身を二つに引き裂いてしまった⁽³⁷⁾。

それでは次に、ミラーがこのおとぎ話から思いついて書き連ねていることをまとめてみたい⁽³⁸⁾。この話はハッピー・エンドになっていない。たしかに王妃は小煩い小人の無理難題から逃れられたが、これから先、王妃はどうやって金を紡ぎ出すつもりなのだろうか。王妃自身が自分の父親や王様から強制されたのと同じようにして、自分の子どもを利用することができるかもしれない。子どもを使えば、不可能なことも可能になるかもしれないのである。ここにも、宿命とも言うべき世代間の“虐待の連鎖”がある。

とはいえ、ミラーは、この話のなかの最も深い意味での悲劇は「ルンペンシュティルツヒェンの運命」にあると見ている。小人は名前を知られてしまい、隠れた存在でいることができなくなったために絶望して、みずからを二つに引き裂いてしまった。しかし、絶望の理由は、もう一つあったのではないだろうか。実際に生きている子どもを手に入れそなかったために、子どもを使って小人自身の運命を変える可能性を失ったことが、より深い絶望感を小人に与えたのではないだろうか。小人は、人里離れた森の奥で、崩れかけた小屋にたった一人で暮らし、誰ともかかわりをもたずにいた。小人は、そのようにしていれば、人間の残虐性に身をさらさずにすみ、世の痛みから逃れられると思っていた。小人は、たしかに好きなだけいくらでも金を紡ぎ出せるという力、人間が考えられるかぎり一番すばらしい力をもっていたけれども、あまりに長く続く孤独な生活に耐え切れなくなり、粉屋の娘の運命に乗じて、自分の運命を変えようと計画したと考えられる。

しかし、この計画はうまくいかなかった。運命の悪戯によって、小人の仮面が剥ぎ取られてしまった。小人が王妃に3日の猶予を与えたのは、その間に、王妃自身が小人を捜しに来てくれることを小人が願っていたからだだった。王妃は捜しに行かなかった。小人は寂しかった。小人には、“王妃が自分(小人)の名前を知ったのはペテンによる”“王妃は悪魔の助けで自分(小人)の名前を顕にした”のであって、“王妃は自分(小人)の名前を王妃自身の力で見つけ出したわけではない”としか、どうしても思えなかった。

こうして小人は、自分の希望が裏切られ、愛と人間らしいつながりによって救われる可能性を失ってしまった。そうなってまで生き続ける理由が小人には見つからなかった。小人にとっては、金も財宝も孤独を慰めてくれないことは、わかりきったことである。自分が役に立つ間は利用しておいて、用がすんだら放り出してしまった王妃に対する小人の憤激は、小人から“力強く生きていこうとする力”を奪い取り、小人を絶望に追いやった。

しかし、小人のこの憤激も、本来であれば、王妃に対してではなく、小人自身の母親に対して向けられなければならなかったとも言える。なぜならば、一

般にこの種の憤激は、自分自身の母親に対して感じなければ、肯定的な意味をもたらさないからである。したがって、この小人の場合、もともと、相手が粉屋の娘ではしやうがなかったとも言える。

もちろん、このおとぎ話をもっと違ったふうに理解することもできる。ミラーは、次のようなことも書き加えている。たとえば、粉屋の娘にとっては、王様が父親で、粉屋が母親であるとする、この母親は、娘を「だし」にして、夫に対して自分の要求を認めさせようとしているとも考えられる。娘と小人については、この二人は一人の人間の異なった部分であるとも考えられるし、本当の兄弟であるとも考えられる。兄弟の一方がきわめて才能に恵まれていたために、その方はほったらかしにしておいて、もう一方の方に援助と功績を与え続けるというようなことは、よくあることかもしれない。しかし、そのようにすると、結局、受け取るばかりの方は、ありがたいとは思いながらも、いつも嫉妬するようになり、最後には相手を憎むようになる。そのような意味で、ミラーは、感情というものは、われわれが望むほど美しくもなければ調和がとれているわけでもないと言う。

ミラーによれば、ルンペンシュティルツヒェンの話からは、家族構造の問題を解き明かしていくのは多少難しいけれども、たとえば、灰かぶり（シンデレラ）、ラプンツェル、いばら姫、白雪姫、ヘンゼルとグレーテル、赤ずきんなどの話が暗示している家族構造の問題は、まず問題なくわかるのではないかとされる。ミラーは、おとぎ話などは“子どもが味わった苦しみの証言”であるものの、社会の「検閲」にかかることなく、われわれの「文化」として認められていると捉えている。そして、これが歴史的に継承されてきているのである。

8 虐待の連鎖の全容

本稿では、これまで、いわゆる“虐待の連鎖”をたどって、最終的には、おとぎ話をてがかりにして“歴史”や“文化”といった領域にまで考察対象を拡大し、その原因とメカニズムを浮かび上がらせて明らかにしようとしてきた。この試みは、幸いにしてこの段階で一段落したのではないかとと思われるので、ここで、これまでの試みから垣間見えてきたいわば“虐待の連鎖の全容”とでも言うべきものを示しておきたいと考える。しかし、それは筆者の手には余るので、アリス・ミラーの力を借りることにしたい。ミラーは、「これだけはなんとしてもわかってもらいたい」として、20項目の事柄を列挙している。ミラーのこのまとめが奇しくも同時に“虐待の連鎖の全容”の解明になっているのではないかと筆者には思われるので、それを（表現を変更して）引用することにした。

- ① 子どもには、罪はない。
- ② すべての子どもには、欲求がある。その欲求とは、他の欲求の何にもまして、安全であり、護られ、かばわれていたい、触れられたい、肌のぬくもりを感じ、やさしくしてもらいたいという欲求である。
- ③ しかし、これらの欲求が満たされることは、ほとんどない。むしろ、それがしばしば悪用される。そして、これが精神的外傷を生み出す。
- ④ この悪用が及ぼす影響は、その子どもの一生にかかわる。
- ⑤ 社会は、通常、大人の味方をする。
- ⑥ 子どもが犠牲にされているということは、つねに無視されてきた。現在も、無視され続けている。
- ⑦ したがって、この犠牲がどのような結果を生み出すかも、見逃されている。
- ⑧ 社会から見放されている子どもは、自分の精神的外傷を自分で抑圧し、加害者を理想化せざるをえない状況に置かれる。
- ⑨ 抑圧は、神経症、精神病、精神障害、そして犯罪を生み出す。
- ⑩ 神経症の場合は、子どもが本来もっていた欲求が抑圧ないし否認されるが、その代わりとして、自分自身に対する罪責感が出てくる。
- ⑪ 精神病の場合は、かつて受けた虐待行為が、常軌を逸したかたちで、変形して出てくる。
- ⑫ 精神障害の場合は、受けた虐待行為に対して苦しむ部分は残っているが、苦しみの本当の原因は隠されたままである。
- ⑬ 犯罪の場合は、混乱、誘惑、虐待が、被害者によって、逆方向のかたちで演じられることになる。
- ⑭ 精神療法家の治療努力は、真実の上に立てられてはじめて実を結ぶので、真実を否認しているかぎりには、何をしても不毛である。
- ⑮ 精神分析で言う幼児性欲論は、社会の無知と盲目を支えている。この理論は、性的に弄ばれた子どもがどうなるかを誤魔化すものである。
- ⑯ 生き延びるためには、幻想が必要である。なぜならば、幻想によって、子ども時代に起こった耐え難い現実をわずかに表現することができるし、同時に現実そのものを隠蔽してたいしたことではないことにしてしまうことができるからである。したがって、思いついて空想によりつくり出した幻想上の精神的外傷といわれているものの下には、もっと重篤な現実の傷が隠れている。
- ⑰ 文学、美術、おとぎ話のなかには、抑圧された乳幼児期の体験が象徴的なかたちで表現されていることがよくある。これらは、子どもが味わった

苦しみの証言なのであるが、この証言は、社会の検閲にかかることなく、われわれの文化として認められている。しかし、それがなぜ認められているのかと言えば、社会が子どもの状況について「本当のこと」を知らず、そのためにその証言が「本当のこと」であると気づかれなかったからである。

- ⑮ 犯罪が起こった場合、たとえば加害者が盲目であったために他にどうしようもなかったからといって、行われた犯罪が帳消しになることはない。
- ⑯ 犯罪の被害にあった犠牲者が、自分はどんな被害にあったのかということを意識するようになれば、その人は加害者になる可能性はないので、新たな犯罪が防止されることができるとであろう。
- ⑰ 問題をかかえている当事者自身が語る言葉の方が、学問的論文などよりも遥かに社会を揺り動かし、社会の意識を変える力をもっている⁽³⁹⁾。

たとえばこのようなかたちで“虐待の連鎖の全容”を捉えたと、今後われわれが少年犯罪や少年非行を、あるいはそれにかぎらず大人の犯罪も含めて一般に犯罪というものを、どのように見て捉えるべきなのかということが、おおよそそのところわかるのではないかと思われる。また、それだけではなく、きわめて困難なことではあろうが、被害を受けた犠牲者はどのようにすれば心の傷を癒して立ち直ることができるのか、さらに加害者の更生はどのようにして図られるべきなのかということも、おぼろげながらもわかってくるように思われる。要するに、“虐待の連鎖”をみずから発見させ、それを克服させることのできるような何らかの手立てを講じることが、被害者の救済にも加害者の更生にも共通して求められているのではないだろうか。そこで次に、このようなことを可能にするのではないかと思われる療法について見てみることにしたい。

9 初源療法

すでに見たとおり、子どもたちが引き受けさせられる苦悩は、覆い隠され、真実の姿が明らかにならないように、強固な戦列が組まれていた。しかし、アリス・ミラーによれば、文学の世界において、その戦列にわずかながら「ひび」が入り、「ゆるみ」が見え始めているという。ミラーは、そのような例として、マリエラ・メーアの『石器時代』(Mariella Mehr: *Steinzeit*, Bern: Zytglogge 1981)という書物を高く評価している。この評価も本稿の“論の進め方”にとって貴重な示唆を与えているので、その評価を引用によって見ておきたい。

最近出版されたマリエラ・メーア(1981年)という人の著書はまさにその

好例といえます。この本は読む者を震撼させずにおきません。著者は32歳の女の人ですが、子ども時代、青年期を通じてほとんど信じられぬほどのひどい目に会わされ、それを耐えしのんでいたのです。しかしその後抑圧しつづけていたかつての痛みをあますところなく再生、体験し、痛み以外の感情も生き直すことができたのです。その結果この人は自分の体験に隠されている迫害と暴行の連鎖を発見し、自己自身も見つけ出すことができました。心が閉ざされほとんど石化しかかっており、周囲からは物扱いされていた哀れな存在だったこの人が生命力に溢れ、感情豊かに、そして苦しむこともできる人間として開花したのは、ある原初療法*のグループに加わってからでした。明らかにそのグループはその種の療法中最良のものだと思われます。このグループは患者を教育しようとせず、何よりも患者が安心できる共感に満ちた同伴者が与えられました。この連れは決して患者をなだめたりすかしたりせず、真実を理論やイデオロギーやごまかしで隠してしまうこともありませんでした。それはすべてこの人の本に書いてあることから感じとれます。読者の側の予想される防衛反応に対する唯一の譲歩が、この本に冠せられた「小説」という分類です。小説であれば読者はここに書かれていることをすべて精神病の病型にあてはめて、「病的な空想力」の所産にすぎないと片づけてしまえます。実際はどれほどおどろおどろしい空想であっても、現実のおどろおどろしさには太刀打ちできないのが普通なのですが。そういう考え方をするなら、マリエラ・メーアの作品はその原則の大いなる例外というべきです。首尾一貫していること、なかで初めて明らかにされていることのもつ力がたいへん強く、しかも訴えかける範囲が広いことにかけて、メーアの作品はずば抜けているといえるでしょう⁽⁴⁰⁾。

この評価では、メーアの作品とともに、その作品を生み出させるもとになった「原初療法」ないしは「初源療法」なるものが、高く評価されている。この評価のなかでこの言葉に付された註(*)には、次のように記されている。

* 原初療法は、その療法を受ける個々の患者が自分のかかえる関係障害を認識し、それと取りくみ、解決できるようになるための学習体系を提供する。

原初療法の特長は、かつて起こったことを全き意味での体験に転換し、記憶を意識に上らせるところにある。かくして新たな意識が形成され、この新たな意識はあらゆる思想、感情、感覚の認識を可能ならしめる。この認識が、現実での出会いを落ちついた、現実的な、ごまかしのない態度で

受けとれるようにしてくれる。この姿勢のおかげで我々は健康な反応ができるようになるのであり、健康な反応ができて初めて、個人的なもの集団的なものを問わず、体験をその全体として考慮できるようになる（スイスのベルン在住の原初（＝初源）療法家、コンラート・シュテットバッハーのコメント）。

シュテットバッハーは原初療法ないし初源療法の考え方と治療法を、『こころの傷は必ず癒える—抑圧された子ども時代に向きあう療法—』（J. Konrad Stettbacher: *Wenn Leiden einen Sinn haben soll. Die heilende Begegnung mit der eigenen Geschichte, mit einem Vorwort von Alice Miller*, Hamburg: Hoffmann und Campe 1990）という書物において解説・紹介している⁽⁴¹⁾。試みに原題を訳してみれば、『苦しみは何らかの意味があるというのなら。自分自身の生育史との出会いによる癒し。アリス・ミラーによるまえがき付き』とでもなるであろうか。

原初療法ないし初源療法という訳語については、必ずしも統一的に用いられているわけではないようであるが、訳書では「初源療法」の方が採用されている。このあたりの事情について、訳書の「訳者あとがき」に、次のように記されている。

ここで少し「初源」という訳語について、説明と釈明を申し上げます。「初源療法」と訳したのは、ドイツ語の Primärtherapie です。Therapie はセラピー、療法、でよいのですが、primär は本来、ラテン語起源の形容詞／副詞で「初発の、一番最初の、第一の、本来の……」などの意味があります。Primärtherapie とはつまり、人間の出生のそもそもの元まで戻って、苦しみや抑圧のメカニズムを明らかにし、それによって自己を解放できるようにしようという療法なのです。本書では、その意図を汲んで、これに「初源療法」という日本語を当てました。

また、primär は本来形容詞／副詞ですから、本文中にもよく単独で現れます。それをすべて「初源の」とするのは、生硬に過ぎるかとも思いましたが、著者は療法との関係を強調するつもりもあって primär という語を使っているらしくも思われましたので、敢えて、すべて「初源 (の)」という訳で通しました⁽⁴²⁾。

すでに触れたように、シュテットバッハーのこの書物は、初源療法の解説・紹介であるので、この書物の“意義”を知るためには、この書物の内容そのも

のではなく、むしろ「アリス・ミラーによるまえがき」を参照した方がよいように思われる。かなりの長きにわたるが、きわめて重要な指摘にあふれていると思われるので、引用してみたい。

この本の登場は、従来のすべての流派の療法に対する重大な挑戦です。コンラート・シュテットバッハーの療法は、抑圧された子ども時代を、危険もなく、患者を混乱させることなく解放できることを証明しているのですから、いくつもの権威ある学派が、そのようなことはできないだろうと言っていたのですが。

もしも私が若い頃にこの本を読み、その時に自分の子ども時代のことを意識できるようになっていたのだったら、私自身、私の子どもたち、そして私の子どもの子どもたちは、余計な苦しみを味わわなくてすんでいたでしょうに。大学を出て、人を混乱させる精神分析の訓練を受ける前にこの本を読むことができたのだたら、私自身も私の患者さんも、あれほど道を踏み迷うことなくすんだことでしょうに。ただ、その時まだシュテットバッハーの初源療法は生まれていませんでした。この療法はまず苦しみがあり、試みが行われ、構想が練られてから説明されるようになったのですし、そうしてようやく今、社会に発表されることになったのです。

私には残念ながらそういうわけで手に入れられませんでした。こうしてこの本ができ、多くの人が人生で誤った方向に行かずにすむようになるだろうことが私の心を慰めてくれます。その人たちはこの本のおかげで結婚とか子どもを生むといった、決定的な逃避に逃げ込まずにすむようになるでしょう。年配の人たちにもこの本は助けになるはずです。その人たちは自分が落ち込んでいる罫から脱出する道を見つけられるでしょう。その道は決して破壊的なものではありませんし、その道をたどることでその人たちがこれまで考えもしなかった内的な可能性にいたることができるでしょう。

この本のおかげで、フロイトの主張とは異なり、子ども時代の現実には充分に把握可能であることがわかるでしょう。さらに、その把握のためには、人工的な、したがって危険をとまなう手段、たとえば LSD、催眠術、限定的な誕生体験などは必要ないこともわかるでしょう。ゆっくりと、充分に自然な防衛反応を考慮しつつ、一步一步、しかし確実に目標に向かうことができるのです。かつて負った精神的外傷の真実を、感情の助けによって明らかにするという目標に。傷ついた人間は自分がどのように傷を負ったのか、そしてその結果何がおこったのかを明らかにし、解決するだけの力を充分もっているのですから。

これは革命的な発見ですし、非常に大きな結果をもたらすに違いありません。この本が世に出た後には子ども時代の虐待の犠牲者を、ややこしい理論、どのようにも解釈できる象徴、瞑想、さらには薬物などまで使って、真実おこったことから遠ざけておくことなどできなくなるでしょう。もしそれが行われるとすれば、子どもの頃の本当の状況があまりにもわかりにくく、おとなになった患者さんが、さまざまな理論が集まってやっている目隠し鬼ゲームに頼らずにいられない場合に限られると思います。自分の真実を知りたいと望む人は、この本が出た以上、間違いなく知ることができるのです。

子ども時代の抑圧は、残酷な仕打ちの中で生きのびるのに役に立ってくれました。けれど成人の後にはその抑圧は、私たちが意識をもち、責任ある生活を送る妨げとなります。ほとんどの人間は、自分が子どものとき傷つけられたのだとわかっていませんし、そのために自分が自分の生活に充分気を配ったり、それを守ったりできないのだということもわかっていません。そのためにそういう人たちは自分の側でも自分の子どもたちを傷つけ、明らかな児童虐待を鍛錬、教育、あるいは社会化などと呼ぶのです。最初期の体験の抑圧は、子どもが生きのびるのを助けてくれますが、その子が成人すると、今度は『汝気づくなかれ』という掟の形であらわれ、おとなはそれに全く逆らえないのです。これが抑圧の代償です。けれど、かつて失ってしまった意識に再びいたる道具があるのだとわかりさえすれば、そのような代償を支払う必要はありません。まじめな療法家ならば、この本が出た後に、この発見を黙殺することはできないはずです。

J・コンラート・シュテットバッハーの、組織的な抑圧解消のやり方は、患者支援および患者の自助に関するまったく新しい概念をもたらすのです。そこには少しも教育臭はありませんし、それは同時に、人間に対する新しい見解、従来まったく考えられていなかった広がりをもつ新たな人間学にもつながるものです。自己自身の体験から児童虐待の力学を認識した療法家が十分な数に達するようになれば、人間の破壊と自己破壊の悪循環が絶ち切れるでしょうから。

私自身この療法を体験し、身体、感情、思考すべてにわたる驚くほどの効果を実感できましたから、苦しみ、助けを求めているすべての方に、私はためらうことなくこの療法をお薦めします。ようやくこう言うことができるようになって、本当にホッとしているのです。10年ほど前に最初の本を出して以来、私の考えに沿った療法家を教えてほしいと言われ続けてきましたから。これまで私はどうしてもそのような希望に応えることができませんでした。療法家が今日まで学び、実践していることと、私の本に書いてあるこ

とは明らかに一致しなかったからです。

ようやくJ・コンラート・シュテットバッハーの考えの中に、児童虐待の事実を十分に踏まえた療法を発見できました。この療法は妥協したり、恐怖によって不安にさせたり、目をくらませたりすることはありませんし、事実を粉飾したり、ごまかしたり、宥してあげなさいとお説教したりもせず、子どもの代弁者として、何に対しても一步も引くことはありません。普通一般にこれまで言われてきた考え方、姿勢、通常のやり方に対する明確な反論が、この本の1ページ1ページから声を上げています。著者は私とは違って著書の中で論争的であることはないにもかかわらず。

ある意味で当然のことながら、自分自身に関する驚きや恐れを承知していて、その経験の上に立って患者につきそい、患者にとって恐るべきその生涯の初源にまでついてきてくれる療法家を求める声は非常に強く大きいものがあります。しかしこの需要に応える存在は、現在のところまだわずかです。けれど、養成は始まっていますし、遠からぬ将来、状態は改善されるでしょう。この書物はおそらく、それまでの間を準備に使い、自己の真実発見の希望をあきらめずにいるのに役立ってくれるでしょう。この療法にはそれを創造的に利用する多くの可能性があります。ですからそれを記述することで、ひとりひとりの読者が、自分の可能性の枠内で新たな発見をすることも間違いなくできるでしょう。ただしそのためには、読者の方でも、それがどんなものであれ、自ら真実に立ち向かう用意がなければいけません⁽⁴³⁾。

要するに、どうやら今のところ、シュテットバッハーの初源療法に優る療法はないようである。ミラーは、シュテットバッハーの初源療法の四段階に従って、かつて抑圧していた感情を体験していけば、その真実を束縛からゆっくりと解放することができるようになるという⁽⁴⁴⁾。それでは、この四段階とは、どのようなものだろうか。シュテットバッハーによれば、この四段階は、人間が“自分の周囲のもの”(つまり、要するに“他者”も含めた「環境」)や“自己自身”と関係を形成していく能力に基づいていとされる。そして、この関係形成能力は、あらゆる人間に「初源的に」そなわった「生まれつき」のものであるとされる。この関係形成能力から言って、人間は、①五感により知覚する、②それに対して感情をいだく、③それを理解する、④その上で、自分の主張(真の欲求)というものをもつ、という四段階が成り立つとシュテットバッハーは考えている。この四段階は、次のような表で示されている。

四段階の表⁽⁴⁵⁾

①五感の感覚（現在のものでも思い出したものでも）

第一の療法段階では、自分の感じていることを言う。

私が何を 感じ取り

気づき

見

聞き

匂うか

私が気にしているものは……

②感情

第二の療法段階では、自分の知覚と感情およびその意味と働きについて語る。

私にそれが 何をするか

どんな力を及ぼすか

何をさせるか

何を残すか

何を意味するか

③理解

第三の療法段階では、状況、場面、そしてそこに登場する人物（自分自身も）を問題にする。説明を求め（私自身の説明をし）理由を尋ねる。

私は尋ねる。

なぜあなたはそれをするのか。何のために

何の役に立つ

どうして

なぜ

目的は……

私は何を 間違えたか

理解しなかったか

やらずにいたか、やってしまったか

④主張（真の欲求）

第四の療法段階では、自分の主張をはっきりさせる。

私はこれはいらない

私はこれが必要だ……生きるために

シュテットバッハーは、「私の考えている初源療法とは、初源の完全性をそこなわれたために生じた無意識を取り除くことである」⁽⁴⁶⁾と言う。抑圧の真の原因は、無意識のなかに押し込められてしまっている。したがって、その無意識を意識化させて、抑圧の真の原因、すなわち“本当のところは、どうだったの

か”ということを、自分が自分に対して明らかにしなければならない。そのためには、この四段階が有効である。それゆえに、シュテットバッハーは、本当のところを理解するためには、この四段階が不可欠であると考えている。

10 再び少年Aの場合

いわゆる神戸連続児童殺傷事件で逮捕された少年Aは、平成16年3月10日、およそ7年間の矯正教育を受けて仮退院した。Aの病理は完治したとみなされたのである⁽⁴⁷⁾。もしそうでなかったら、仮退院が可能になるはずがない。それでは、この間、Aに対してどのような矯正教育がなされたのであろうか。

草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』によれば、ひそかに「赤ん坊包み込み作戦」あるいは「疑似家族作戦」と呼ばれる更生のための計画が立てられたという。すなわち、(おそらく虐待を受けたために)歪みきってしまったAに、生きる力・生きるエネルギーを取り戻させるためには、Aを赤ん坊から育て直すようなプロセスが必要だと考えられたのである⁽⁴⁸⁾。換言すれば、それだけAの生育環境は劣悪だったわけで、Aのそれまでの14年間は、もうどうしようもないのだけれども、それはそれとして、かなりの困難が伴うかもしれないが、Aを“今生まれたばかりの赤ん坊”にまで巻き戻して、今度は、あたたかい愛情に満ちた健全な生育環境で“はじめから育て直す”ことに挑戦してみようと考えられたのである。

この考え方は、人間の出生のそもそもの元まで戻って、苦しみや抑圧のメカニズムを明らかにし、それによって自己を解放できるようにしようとするシュテットバッハーの「初源療法」の考え方と共通している部分があるように思われる。少なくとも、“初源に戻る”という点では、同一の発想をしていると言えるのではないだろうか。ただし、シュテットバッハーの「初源療法」の場合は、初源に戻ることにによって抑圧の真の原因を解放するという意識（あるいは無意識）の方により力点が置かれているのに対して、「赤ん坊包み込み作戦」の場合は、結果的にそのことも同時に果たされることに通じるのであろうが、そのことよりも、むしろ実際に初源から育て直すという行為の方により力点が置かれているように思われる。(人間はもちろんビデオ・テープではないが、ビデオ・テープ(磁気テープ)の場合、一回録画していても、最初まで巻き戻せば、まったく別のものを最初から録画し直すことができる。人間の場合にも、それと同じようなことができるのだろうか。「赤ん坊包み込み作戦」の考え方は、そのようなことに挑戦してみようとする考え方だと言えるであろう。)

言い方はよくないかもしれないが、言い方によっては、シュテットバッハーの「初源療法」は、特に何か手の込んだことをするわけではなく、“単に四段階

の関係形成能力に従って”抑圧の真の原因を突き止めていくだけの“きわめて素朴な”療法である。また同じように、「赤ん坊包み込み作戦」も、少年Aを“今生まれたばかりの赤ん坊”にまで巻き戻して、“はじめから育て直すだけ”という、これまた“きわめて素朴な”作戦である。しかし、現実には、これがなかなかできないのではないだろうか。このことは、ルンペンシュティルツヒェンが願ったように、“愛にあふれた普通の生活がしたい”と思っても、なかなかこれがかなえられないという悲しい宿命を連想させると同時に、現実的には、よい意味での“普通の生活”“普通の生育環境”がいかに重要なものであるかを示唆していると思われる。

少年Aは、「親の愛情をいままで感じたことがない、誰からも愛されない、自分は異常で世の中で無意味な人間、魔物なのだ……」とずっと思い続けてきたという。そのようなAを矯正するためには、Aの今の人格を変えるのではなく、愛情あふれる環境のなかで、最初から育て直し、他者と人間関係をもてるようにしなければならないと考えられた。このような、言ってみれば“ごく普通の”（実は、それが難しいということがアリス・ミラーの分析からわかるのだけれども……）ことをするために、医療少年院のスタッフが疑似家族の役割を演じることになった。このプロジェクトチームは、「お父さんと息子」「お母さんと息子」という親子関係のような雰囲気をつくってAに接することにしたという⁽⁴⁹⁾。

「赤ん坊包み込み作戦」の効果が現れるまでには、長い時間を要した。少年Aの硬直した心をはじめて打ち破ったのは、ある法務教官の「感情の爆発」だったという。それは、Aが医療少年院に入所して一年が過ぎた、ある冬の日のことだった。「お前は、何でこんなことをやってしまったんだ！」その法務教官とAの二人だけしかいない底冷えのする部屋に、張り詰めた空気が流れ、法務教官の震えた声が響き渡った。法務教官の目には、涙があふれていた。それまで怒鳴られたことなどなかったAは、目を丸くしてただ驚くばかりだったという。法務教官は、少しでも早く「Aの本心」、つまり“Aの抑圧の真の原因”を引き出さなければならないと焦っていた。その当時、Aの心は、「何でこんなことをやってしまったんだ！」と叫んだ担当の法務教官の「気持ち」を受け止めることはできる程度には成長していた。その数日後、この法務教官との交換日記にAは、「親でもない他人が、なぜ自分のことで涙を流してまで言ってくれるんだろうとビックリした」と書いた。やがてAは、この法務教官を「お父さんのような人」と綴るようになった。この法務教官は、「今まで、本当の親に気を遣って生きてきて、自分がこうすれば大人がどう反応するかわかっていました。だから親の前ではいい子を演じる。本気で付き合わなければ、彼の心は開かなかったでしょう」と話したという⁽⁵⁰⁾。このことは、親に気を遣って生きなけれ

ばならないような人間関係からは抑圧しか生まれず、親が本気になって子どもを思いやり全身全霊をささげて立ち向かってくるような人間関係では、必ずしもそうならず、むしろ信頼関係が生まれてくることもあることを証明しているように思われる。

もう一人、少年Aの矯正に大きな役割を果たした人物がいた。Aが「お母さんのような人」と日誌に記した女性精神科医である。この精神科医は、疑似家族体験で母親役を演じていた。Aの実際の母親より3歳ほど若く、当時46歳だった。Aは、まるで腫れ物に触るような扱いを受けていた。そこで、この女医は、そのようなAにはショックを与え、自分を見つめさせなければならないと考えて、Aに「性格異常。治らないわよ」と話しかけた。この女医は、このように物事をはっきり言うタイプの人であったため、Aも一度は反抗して反省房に入れられたことがあるそうだ。しかし、それにもかかわらず、この女医は、Aにとっては母親のような存在であった。Aは、明らかにこの女医を慕っていたという。なぜだろうか。この女医は、診察のない日は、用事がなくてもAの個室の前に現れたそうだ。颯爽とした雰囲気をもつ彼女は、格子越しにAに明るく話しかけたそうだ。それは毎日のように続いたという。

事件後、Aは次のような心情を吐露している。「とうとう僕は淳君を殺してしまった。すべてを終え、帰ってきて玄関の戸を開けたら、お母さんがテレビを見ながら大笑いしていた。僕はその時すごい衝撃を受けた。もちろん親にはまったく分からないように、100パーセントの自信を持っていたけれど、僕がやったことはどこかでお母さんには分かるかもしれない。お母さんに大変なことをしたと気づいてほしかったけれど、気づかなかった。そこで僕はすごい衝撃を受けて、僕の母親はやっぱしブタ野郎だ、あいつは人間やない、母じゃないと思った」。

Aはお母さんに気づいてほしかった。このAの気持ちは、まさにルンペンシュティルツヒェンの気持ちではないだろうか。ルンペンシュティルツヒェンは、王妃（本当は彼自身の母親）に、自分を捜しに来てもらいたかった。自分の状況を理解してもらいたかった。しかし、王妃は来なかった。

それに反して、Aの母親役の女医は、毎日のようにAのもとへ通った。Aのことを（女医の表面的な態度はどうであれ）本当に理解しようとした。ルンペンシュティルツヒェンは、王妃が自分で捜しに来てくれさえすれば勘弁してやろうと思っていたのではないだろうか。Aは、母親役の女医が毎日のように来てくれたので心がほぐれていったのではないだろうか。

Aがこの女医を慕っていく過程を、ある関係者が次のように証言しているという。「その女医さんがお母さん役を演じたことで、Aは徐々に女医さんだけに

心を開いていった。彼女に冗談を言って笑わせるなど、甘えの行動も少しは見られるようになりました。それで多少の母子関係がでてきた。一年経つと赤ちゃんも育つじゃないですか。そんな感じでした」⁽⁵¹⁾。

少年Aが受けた矯正教育の全容には大いに関心を惹きつけられるが、本稿ではもはやこれ以上このことに言及することはできない。Aは、その後紆余曲折を経て、仮退院することになった。ある関係者は、「Aに再犯の恐れはない」と強く言い切ったそうだ。そして、「退院したAが何者かに襲撃され、そのときに暴れて人に怪我をさせるという、その程度の恐れはあります。しかし、彼が以前と同じパターンで小さな子どもを殺す可能性はゼロです。なぜなら、もはや彼にはその『原因』がなくなったからです」と言ったそうだ⁽⁵²⁾。もはや「原因」がなくなった。これはやはり「初源」に戻して育て直したからであろうし、「初源」に戻して育て直せば「原因」は克服されるということであろう。

11 悪人正機説と闇教育の克服

本稿を閉じるに際して、これまでの考察から、筆者にとってはますますわからなくなってきた問題に少し言及してみたい。その問題とは、今更ながらで恥ずかしいかぎりであるが、“そもそも、人間が生きていくということは、どのようなことなのか”という問題である。もちろん、これは哲学の根本問題で、簡単には答えられない。にもかかわらず、この問いが、ここでは、ここなりの角度から発せられなければならないように、どうしても思われるのである。

少年Aの矯正記録を記した草薙氏は、鎌倉時代に親鸞が説いた「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」という悪人正機説が、この記録の執筆後にとっても心に響くそうである。この記録の読後、筆者もおそらくそれに似たような気持ちをもった。草薙氏は、悪人正機説を、「自分の悪を自覚し、そのために泣き、悔いることのできる人間こそが救われる。自分の中の悪にも気づかず、うぬぼれ、心を固く閉ざしている人間は救う必要はない」という意味に解釈しているそうである。また、少年院の職員たちは、すべてこのような気持ちで非行少年たちに接しているという⁽⁵³⁾。筆者には、このような解釈は、アリス・ミラーやコンラート・シュテットバッハーの基本的な考え方と、必ずしも相容れないわけではないと思われる。

悪人正機説は、よく知られている。しかし、これは親鸞の言葉ではなく、法然の言葉ではないかという説もある。また、悪人正機説が収められている『歎異抄』という書物自体が、そもそも誰によって書かれた著作なのか、未だに確実な結論を得ていない。しかし、多くの場合、おそらくは、親鸞の晩年に関係が深かった唯円が、親鸞の死後に編纂したのではないかと考えられている⁽⁵⁴⁾。

かなり謎めいてはいるものの、それはそれとして、あるテキストに従って、悪人正機説と言われる部分の原文と口訳を見てみたい。

善人^{ぜんにん}なほもつて、往生^{わうじやう}を遂ぐ。況んや、悪人^{あくにん}をや。

しかるを、世^よの人^{ひと}、常^{つね}に言はく、「悪人^{あくにん}なほ往生^{わうじやう}す。いかに況んや、善人^{ぜんにん}をや」。この条^{じょう}、一旦^{いつたん}、その言はれあるに似たれども、本願^{ほんぐわん}・他力^{たうりき}の意趣^{いしゆ}に背けり。その故^{ゆゑ}は、自力^{じりき}作善^{さくぜん}の人^{ひと}は、偏^{ひと}へに他力^{たうりき}を頼む心^{たの}欠けたる間^か、弥陀^{あひだ}の本願^{みだ}にあらず。しかれども、自力^{じりき}の心^{しん}をひるがえして、他力^{たうりき}を頼み奉^{たてまつ}れば、真実^{しんじつ}報土^{ほうど}の往生^{わうじやう}を遂ぐるなり。

煩惱^{ぼんなう}具足^{ぐそく}のわれらは、いづれの行^{ぎやう}にても、生死^{しやうじ}を離るることあるべからざるを憐^{あはれ}み給^{ぐわん}ひて、願^{おこ}を起し給^{ほん}ふ本意^{ほんい}、悪人^{あくにん}成仏^{じやうぶつ}のためなれば、他力^{たうりき}を頼み奉^{たてまつ}る悪人^{あくにん}、もつとも往生^{わうじやう}の正因^{しやういん}なり。

よつて、「善人^{ぜんにん}だにこそ往生^{わうじやう}すれ。まして悪人^{あくにん}は」と仰^{おほ}せ候^{さうら}ひき。

[口訳]

善人でさえやはり、往生を果たすのだ。まして、悪人は言うまでもないのだ。

それなのに、世間の人々は、いつも、「悪人でさえ往生する。まして、善人は言うまでもない」と言っている。このことは、一応は、理由があることに近いようであるが、本願と他力の趣旨に反している。その理由は、自己の力を信じて善事を実行する人は、仏の助けをひたすらに頼りに思う心が欠けているので、阿弥陀仏の本願を受けとるべき性質のものではない。そうではあるがしかし、その自力の心を根本から転換させて、仏の他力をお頼み申し上げれば、真実の浄土の往生を果たすことになるのだ。

煩惱が十分に身に備わっているわたくしたちは、どのような修業によっても、生死を続ける迷いの境地を完全に脱け出ることがあるはずがないということをおぼんにお思いになって、救いとうろとなされる本願をお起こしになった、根本の御意志は、善人よりも、悪人が仏となるためであるから、仏の他力をお頼み申し上げる悪人こそ、ほんとうに、往生できる正しい種なのである。

それゆえに、「善人さえも往生するのだ。ましてなおさら、悪人は必ず往生できるのだ」と、親鸞聖人はおっしゃいました⁽⁵⁵⁾。

親鸞は、たしかにここで、「善人」と「悪人」の区別をしている。しかし、いくら「善人」が自助努力したところで、それは高が知れているのである。それ

は、ちょうどルンペンシュティルツヒェンや王妃が、いくらがんばっても、負わされた宿命によって限界にぶち当たらなければならないのと似ているようにも思われる。すべての人間には、宿命が負わされている。宿命を負わされていない人間などは、存在しない。

そうすると、親鸞の言う「善人」とは、仮象であったとしか考えられない。親鸞にとっては、「善人」などというものは、そもそもが存在不可能なものであり、現実には、「悪人」という一種類の人間しかいなかったと考えられるのである⁽⁵⁶⁾。

「悪人」には、自己存在の根源的悪性について深い自覚をもつようになる可能性がある。しかし、「善人」には、そのような自覚をもつことが難しい状況がある。なぜならば、「善人」は、自分には根源的悪性はないと思っているからである。

しかし、果たして、そうであろうか。「善人」には根源的悪性などはないと言えるのだろうか。アリス・ミラーやコンラート・シュテットバッハーが強調していたように、人間の宿命として、虐待されなかった人間はいないわけで、その意味で“悪を与えられなかった人間”もいないとしか言いようがない。悪を与えられたのに、それを見て見ぬふりをするのが「抑圧」であり、その抑圧に無自覚なのが「善人」なのではないだろうか。その意味での「善人」は、実は“悪人”なのではないだろうか。

そのように考えると、すべての人間は、その人間がすでに“存在”すること自体が“悪”にかかわるということであるから、本当は“悪人”なのである。このことに気づかない人間もいる。それが、自分は悪いことをしないと自分で思っている「善人」である。そのような人間は、救われないのである。阿弥陀如来はどんな人間でも絶対的な幸福へと救いとうろうという誓いを立てておられるけれども、そのような「善人」(本当は“悪人”)は例外である。「弥陀の本願にあらず」なのである。(—しかし、その「善人」が仮象だとすれば幸いである。)

阿弥陀如来に救いとられるのは、自分の悪に気づいた「悪人」、すなわち“悪”に気づいたがゆえに“善”に向かおうとする人間、その意味での“善人”だけなのである。(—現実には「悪人」だけしか存在しないとすれば、結局は全員が阿弥陀如来に救いをもってもらうことができるということになる。)

この問題は、いわゆる「闇教育」の問題を思い出させる。すべての人間は、教育を受けないわけにはいかない。しかし、教育を受けると、望むと望まないにかかわりなく、同時に抑圧を受けてしまわざるをえない。そのことを自覚している人間には、救われる可能性がある。しかし、そのことを自覚していない

人間は、救われたいと言えるのではないだろうか。しかし、たとえそうだとし
ても、そもそも“抑圧をもたらさないような教育”“抑圧関係のない教育”など
といったものがあれば最初からうまくいくのではないかと思われる。そのよう
なものは、実際にあるのだろうか。

きわめて象徴的なことであるが、親鸞は一人の弟子もとらなかったという。
親鸞の考え方によれば、われわれは全員が御同行・御同胞^{おんどうぎょう おんどうほう}なのである。喜ばし
き友であり、兄弟であり、阿弥陀如来のもとでは全員が平等なのである⁽⁵⁷⁾。こ
のような考え方は、もちろん他の宗教や政治思想などにも見られるが、筆者に
は、このような考え方こそが、“虐待の連鎖”を絶ち切る最終的な“切り札”で
はないかと思われる。なぜならば、理想としてではなく、現実^{現実}に平等な関係の
人間関係（御同行・御同胞）というものがあったとすると、そのような関係の
もとで行われる“教育”においては、原理的に“抑圧関係が生じない”ことが
期待されるからである。このようにして、「闇教育」は克服されるのではないだ
ろうか。

親と子が、教師と生徒が、あるいは一般に人間と人間が御同行・御同胞とし
て“抑圧関係のない人間関係”においてともに生きていこうとすることがきわ
めて重要であるように思われる。もし、そのようなことが可能になれば、“悪”
を乗り越えて“善”の実現へ向かおうとする共同探求としての“教育”という
ものが可能になり、シュテットバッハーの初源療法を評してミラーが言ったよ
うな“教育臭のしない教育”が可能になるのではないだろうか⁽⁵⁸⁾。

註

- (1) 平成16年(2004年)6月1日に、長崎県佐世保市の小学校で、6年生の女兒が同級生
の女兒にカッターナイフで首を切られて死亡するという事件が起こった。この佐世
保事件後ほどなくして、森田健(福岡女子大学人間環境学部生活環境学科教授)から、
共同研究のかたちで、現代の子どもの問題や環境の問題を対人関係や教育の側面か
ら取り扱ってみてはどうかという誘いが筆者になされた。佐世保事件の重大性に起
因した誘いであった。筆者も事件の重大性を鑑みて、この共同研究に参加させてもら
うことにした。受けた教育を含めた生育環境と少年事件の間に何か深い関係がある
のであれば、畏れ多くも“教育学”を専攻する筆者としては、どのような教育が問題
をはらみ、どのような教育が健全な人間形成に資するのかを(少年事件等の事例分析
を通して)明らかにすることは、今更ながらも避けて通れない研究課題であるように
思われたからである。およそこのようにして本稿の研究テーマが定まった。住環境
学、栄養教育論、心理学、教育学を専攻する4人で行うことになったこの共同研究の

全体の概要は、次のとおりである。

- 平成16年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 A (2) 課題番号 16207021「地域の光環境条件がもたらすヒトの環境適応能への影響に関する研究」(研究代表者 森田健) に対する間接経費を用いた共同研究
- 研究課題 「現代生活環境が子どもの心と体に及ぼす影響に関する研究」
- 共同研究者及び研究テーマ
 - ・ 森田健 (福岡女子大学人間環境学部生活環境学科教授) 「光環境がもたらす子どもの生体リズムへの影響」(ADHD や自閉症児の睡眠—活動リズム調査を通して生活環境の光を考察する。)
 - ・ 沖田千代 (福岡女子大学人間環境学部栄養健康科学科教授) 「現代の食生活環境がもたらす子どもの発達に関する研究」(調査を通して、児童自らが自らの食事習慣を考える健全で安全な食を考察する。)
 - ・ 山口快生 (福岡女子大学文学部人文学系教授) 「不登校児の心の問題に関する研究」(スクールカウンセリングの事例分析を通して、不登校児の心の問題を考察する。)
 - ・ 森邦昭 (福岡女子大学文学部人文学系教授) 「少年事件と生育環境としての人間関係」(事例分析を通して、健全な人間形成に不可欠の条件を考察する。)
- (2) ヤーコプ・フォン・ユクスキュル、ゲオルク・クリサート『生物から見た世界』日高敏隆、野田保之訳、思索社、1973年、20頁。
- (3) ヤーコプ・フォン・ユクスキュル、ゲオルク・クリサート『生物から見た世界』27頁参照。
- (4) Vgl. *Duden-Oxford Großwörterbuch Englisch*, Mannheim/Wien/Zürich 1990.
- (5) Vgl. G. H. Müller: Umwelt. In: *Historisches Wörterbuch der Philosophie Bd. 11*, hrsg. von J. Ritter, K. Gründer und G. Gabriel, Basel 2001, S. 99-105.
- (6) 平成16年(2004年)9月8日に、法務省は少年法改正を法制審議会に諮問した。この諮問第72号の文言は、次のとおりである。「少年非行が深刻な状況にあり、触法少年による凶悪事件が相次いで発生するなどしている現状に適切に対処するためには、少年法等を早期に整備する必要があると思われるので、別紙要綱(骨子)について御意見を承りたい。」その別紙要綱(骨子)には、次の3つの大きな柱が立てられている。①触法少年及びぐ犯少年に係る事件の調査(警察の調査権を明記すること)、②14歳未満の少年の保護処分の見直し(14歳未満の少年も少年院に送致できるようにすること)、③保護観察における指導を一層効果的にするための措置等(保護観察の内容を大きく改めること)。なお、法務省の説明によれば、これは佐世保事件などに見られる少年事件の低年齢化に対応するためのものとされる。法務省は、平成17年(2005年)の通常国会での法整備を目指しているが、少年の保護・更生を重視する少年法の理念と今回の改正内容とのかねあいをめぐって、法制審議会では大きな議論が巻き起こされるのではないかとみられている。(法務省ホームページ <http://www.moj.go.jp/>などを参照)

- (7) 法務省法務総合研究所編『平成15年版犯罪白書—変貌する凶悪犯罪とその対策—』国立印刷局、2003年、275—277頁参照。
- (8) 原口幹雄「被害者との向き合い大切」2004年（平成16年）6月20日付け朝日新聞参照。
- (9) 法務省法務総合研究所編『平成15年版犯罪白書—変貌する凶悪犯罪とその対策—』290頁参照。
- (10) この事件の概要については、主として次のものを参照した。草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』文藝春秋、2004年。朝日新聞大阪社会部『暗い森 神戸連続児童殺傷事件』朝日文庫、2000年。毎日新聞大阪本社編集局『少年—小学生連続殺傷事件・神戸からの報告』毎日新聞社、1997年。高山文彦『地獄の季節—「酒鬼薔薇聖斗」がいた場所』新潮文庫、2001年。高山文彦『「少年A」14歳の肖像』新潮文庫、2001年。土師守『淳』新潮文庫、2002年。山下京子『彩花へ—「生きる力」をありがとう』河出文庫、2002年。「少年A」の父母『「少年A」この子を生んで……父と母悔恨の手記』文春文庫、2001年。
- (11) 朝日新聞大阪社会部『暗い森 神戸連続児童殺傷事件』228頁参照。
- (12) この諮問は、その約1か月後の8月4日に行われた。これに対する最終答申は、翌年の平成10年（1998年）6月30日に出された。そのタイトルは、「新しい時代を拓く心を育てるために一次世代を育てる心を失う危機—」というものであった。サブタイトルが婉曲な言い回しになっていて、何のことかイメージがしにくい、有り体に言えば、要するに“今時の親は子どもをきちんと育てることができなくなっているのではないか”という警告が発せられているのである。この答申は、（後述の『心のノート』が出された後から）振り返ってみれば、いわば「親向けの『心のノート』」の性質をもつものであったと捉えられてもいる。（小沢牧子「＜心の教育＞とはなんなのか」小沢牧子編集『子どもの＜心の危機＞はほんとうか？』（＜きょういく＞のエポケー第2巻）教育開発研究所、2002年、104—117頁、106頁参照）また、この答申を受けて、「心の教育」というものが政策として強力に推し進められていくことになる。この「心の教育」に関する国会での質問回数は、平成10年に69回、平成11年に53回、平成12年に1307回、平成13年に2714回、平成14年に27回であったという。この推移を見るかぎり、「心の教育」の国会審議では、平成13年がピークであったようである。このことと並行して、『心のノート』というものが作成され、文部科学省は平成14年の春に、これを全国の小中学生に無料配布した。平成12年と13年に突出した回数の国会質問がなされているが、その質問の多くは、『心のノート』の教材づくりのための質問だったのではないかと推測されている。（金子隆弘『「心のノート」が登場した背景』柿沼昌芳、永野恒雄編著『「心のノート」研究』批評社、2003年、118—127頁、122頁参照）
- (13) 朝日新聞大阪社会部『暗い森 神戸連続児童殺傷事件』247—249頁参照。
- (14) 朝日新聞大阪社会部『暗い森 神戸連続児童殺傷事件』258—260頁参照。
- (15) 草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』19—20頁。
- (16) 草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』21頁。

- (17) 草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』172頁参照。
- (18) 少年Aの生い立ちについては、主として、草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』79-101頁を参照した。
- (19) 草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』90頁に、次のような記述がある。「担任の教師が母親に見せるのをためらい、この部分を省略してしまったのである。Aの逮捕後、母親は報道でこの部分を知ることになる。母親は当時、二つの作文を読んでも、Aの深層心理まで読み取ることはできなかった。SOSのシグナルを担当と母親が見落したことは大きな過失と言わざるを得ない。」
- (20) 「少年A」の父母『「少年A」この子を生んで……父と母悔恨の手記』147頁。
- (21) 多分に誤解を招く言い方であるが、結局のところ少年Aが一連の凶行に及んだのはAが虐待を受けたために精神を病んだからだとするれば、凶行の責任はA(のみ)にあるのだろうかという疑問もわく。この言い方は、Aにより被害をもたらされた方々にはかぎりなく“心無い”言い種にしかならない。それは承知しているつもりではあるが、Aの場合のような事例では、まずは、A本人というよりも、(むしろ)Aの母親にこそ“本当の責任”があるような気がしてならない。Aが虐待したのは、Aの母親がAを虐待したからだとするれば、そのようになるのではないだろうか。しかし、もしそうだとすると、今度は、なぜAの母親がAを虐待したのかという疑問がわく。それはおそらく、Aの母親自身が誰かによって虐待されていたからだとすることになるのではないだろうか。それが誰かはわからないが、ひょっとするとAの母親の夫であったかもしれないし、父親であったかもしれない。このように考えると、最終的には、いわば“虐待の連鎖”とでも言うべきものが想定される。しかし、だからといって、この考え方は、“実際に凶行に及んだ者”の責任を不問にするという考え方では決してない。犯した罪はきちんと償わなければならないのは当然である。しかし、それだけでは、根本的な原因は解消されないのではないかと考えているのである。“虐待の連鎖”を絶ち切ることが同時に果たされなければならない。この課題は、紛れもなくわれわれの“環境改善”の問題であるし、“大人の責任”や“社会の義務”の問題である。
- (22) この事例は、次の箇所の表現を多少変更して再録したものである。牛島定信『心の健康を求めて—現代家族の病理—』慶應義塾大学出版会、1998年、14-16頁(「ある女子高生」)。
- (23) 牛島定信『心の健康を求めて—現代家族の病理—』16頁。
- (24) この事例は、次の箇所の表現を多少変更して再録したものである。アリス・ミラー『才能ある子のドラマ』野田倬訳、人文書院、1984年、109-111頁。
- (25) アリス・ミラー『沈黙の壁を打ち砕く—子どもの魂を殺さないために—』山下公子訳、新曜社、1994年の表紙カバー裏の著者紹介では、次のように記されている。[アリス・ミラーは]1923年ポーランド生まれ。1946年スイスに移住。哲学の学位取得後、精神分析療法家の養成を受け資格を取得。約20年間精神分析の療法と養成に携わる。1979-81年にかけて教育にひそむ暴力性を容赦なく抉り出した『才能ある子のドラ

マ』『魂の殺人』『禁じられた知』の三部作を刊行。世界的ベストセラーとなる。1988年精神分析と訣別し、現在は著述活動に専念。スイス・チューリヒ近郊在住。著書は他に『「子ども」の絵』など。(本稿では、これ以後、ミラーの三部作から、本稿の問題設定の趣旨に合致した事例を、それぞれ一つずつ取り上げていくことにしたい。)

- (26) アリス・ミラー『才能ある子のドラマ』111頁参照。
- (27) アリス・ミラー『才能ある子のドラマ』112-113頁参照。
- (28) アリス・ミラー『才能ある子のドラマ』114-115頁参照。
- (29) アリス・ミラー『魂の殺人—親は子どもに何をしたか—』山下公子訳、新曜社、1983年、259-313頁(「ユルゲン・バルチューその終わりから見た一つの生命—」) 参照。
- (30) アリス・ミラー『魂の殺人—親は子どもに何をしたか—』265-267頁。
- (31) アリス・ミラー『魂の殺人—親は子どもに何をしたか—』275-276頁。
- (32) アリス・ミラー『魂の殺人—親は子どもに何をしたか—』283-284頁。
- (33) アリス・ミラー『魂の殺人—親は子どもに何をしたか—』268頁。
- (34) アリス・ミラー『魂の殺人—親は子どもに何をしたか—』268-269頁。
- (35) アリス・ミラー『魂の殺人—親は子どもに何をしたか—』303-304頁。ちなみに、ミラーのこの書物の邦題は『魂の殺人』となっているが、この「魂の殺人」というレベルがいろいろの虐待のなかで最も酷い虐待のレベルになっているのではないかと思われる。そして、このレベルの虐待を受けた者が、実際に「他者の殺人」という凶行に及ぶという構造になっているのではないかと思われる。なお、この書物の原題は *Am Anfang war Erziehung* となっている。すなわち、すべての結果に先んじて、原因として『最初に教育があった』わけである。
- (36) アリス・ミラー『禁じられた知—精神分析と子どもの真実—』山下公子訳、新曜社、1985年、342-348頁参照。
- (37) この話は、筆者が次の箇所を筆者なりにまとめたものである。アリス・ミラー『禁じられた知—精神分析と子どもの真実—』344-346頁。
- (38) アリス・ミラー『禁じられた知—精神分析と子どもの真実—』346-348頁参照。
- (39) アリス・ミラー『禁じられた知—精神分析と子どもの真実—』482-483頁参照。ただし、本文の括弧書きで断ったように、表現には変更を加えている。
- (40) アリス・ミラー『禁じられた知—精神分析と子どもの真実—』458-459頁。要するに、マリエラ・メーアは自分が受けた“虐待の連鎖”に気づいてしまったのである。そのことによって、彼女は自分が受けた傷を癒していけるようになった。しかし、この“虐待の連鎖”に“気づく”ことは、通常は社会によって「禁じられ」ている。ミラーの訳書『禁じられた知』の原題は *Du sollst nicht merken* となっている。『汝気づくなかれ』というのが社会の「掟」なのである。
- (41) J・コンラート・シュテットバッハー『こころの傷は必ず癒える—抑圧された子ども時代に向きあう療法—』山下公子訳、新曜社、1993年。
- (42) J・コンラート・シュテットバッハー『こころの傷は必ず癒える—抑圧された子ども時代に向きあう療法—』173-174頁。

- (43) シュテットバッハーのこの書物の訳書の訳者による「追記」によれば、アリス・ミラーの希望により、訳書の1997年初版第8刷から(初版第1刷は1993年)、ミラーによる「まえがき」と「あとがき」が削除されている。このような事情もあって、ここでは、ミラーの別の訳書の本文から引用している。すなわち、ミラー自身が、この「まえがき」を次の箇所に転載しているのである。アリス・ミラー『沈黙の壁を打ち砕く—子どもの魂を殺さないために—』山下公子訳、新曜社、1994年、177-182頁。
- (44) アリス・ミラー『沈黙の壁を打ち砕く—子どもの魂を殺さないために—』209頁参照。
- (45) J・コンラート・シュテットバッハー『こころの傷は必ず癒える—抑圧された子ども時代に向きあう療法—』79頁。
- (46) J・コンラート・シュテットバッハー『こころの傷は必ず癒える—抑圧された子ども時代に向きあう療法—』81頁。
- (47) とはいえ、少年Aの病理は完治していないという見方もある。たとえば次のレポートなどで、そのようなことが報じられている。一橋文哉「酒鬼薔薇は治っていない！」新潮社『新潮45』2004年10月号(第23巻第10号・通巻270号)64-80頁。
- (48) 草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』73-74頁参照。
- (49) 草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』72-73頁参照。
- (50) 草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』115-119頁参照。
- (51) 草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』120-123頁参照。
- (52) 草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』188頁参照。
- (53) 草薙厚子『少年A 矯正2500日 全記録』211頁参照。
- (54) 伊藤益『歎異抄論究』北樹出版、2003年。石田慶和『歎異抄講話』法蔵館、2003年などを参照。
- (55) 安良岡康作『歎異抄全講読』大蔵出版、1993年、98-99頁。
- (56) 伊藤益『歎異抄論究』91-92頁参照。
- (57) 大法輪閣編集部編『親鸞と歎異抄入門—その心の遍歴と他力の教え—』2001年などを参照。
- (58) このような“教育”を実際に可能なものにする目的で、筆者は現在、福岡市教育センター道徳研究室で、「学習意欲と学習スキルを向上させる道徳教育実践の試み—「ビッグマリオン効果」及び『教師学』の応用—」という共同研究を遂行中である。この成果は、福岡市教育センターの平成16年度研究報告書としてまとめられ、平成17年2月に日の目を見る予定である。

【付記】

本研究(「少年事件と生育環境としての人間関係」)は、平成16年度日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究A(2) 課題番号16207021「地域の光環境条件がもたらすヒトの環境適応能への影響に関する研究」(研究代表者 森田健)に対する間接経費を用いた共同研究(「現代生活環境が子どもの心と体に及ぼす影響に関する研究」)において森邦昭が行った個人研究の成果である。